2　熊本県下の古墳時代箱式石棺

島津屋　寛

はじめに

箱式石棺は全国的に広く分布し、墳丘を持たない集団墓から巨大な墳丘を持つ首長墓の主体部にまで広く採用される埋葬施設である。しかしその多くは墳丘を持たない、もしくは墳丘の規模が小さく、また副葬品が貧弱であることから、一般に箱式石棺は下位の首長や、首長よりも下位に位置付けられる人々の墓であるとされる。

熊本県下における箱式石棺の分布は阿蘇郡小国宮原の梅木古墳を北限とし、球磨郡錦町の大王原石棺を南限として、熊本中・北部と八代海沿岸部・天草諸島に広く見られる（図１）。特に宇土半島・天草諸島では弥生時代から古墳時代初頭にかけて集団墓の主体が箱式石棺であったと指摘され（甲元1990)、箱式石棺群の様相を呈する遺跡を数多く見ることができる。現在までに箱式石棺と報告されたものは、筆者が確認できた限り303遺跡490基に上る。しかしながら、発掘調査がなされていないものも多く、それらは分布調査などによって所在、もしくは概要が知れる程度にとどまっている。更に、開墾などの理由で非常に多くの箱式石棺が消滅し、現在ではその詳細を確認することもできない。そのためか、熊本県域の箱式石棺の研究は殆どといってよいほど行われず、その集成や概観以上に踏み込んだものは無い。

そこで本稿においては、まず熊本県下における箱式石棺の検討・分類を行い、下位首長層、または首長よりも下位の人々といわれる箱式石棺被葬者の動向について論ずることを目的とする。

1　研究の現状と問題点

(1) 研究略史

古墳時代における箱式石棺が、初めに注目され論じられたのは、笹井新也氏によってである。当時の石棺の認識は、古墳時代に属するものであり、その形状は、割竹形石棺や舟形石棺、家形石棺などの刳り抜き式石棺が一般的なものとされていた。そこで笹井氏は、阿波の吉野川下流南方面から海岸南方面にかけて多く見られる板状緑泥片岩を、長方形の箱状に組み合わせたものを「阿波式石棺」として提唱した。これに対して、「阿波式石棺」の名称を適当でないとする喜田貞吉氏との論争が起こったが、その論争は石棺が槨として機能するか棺として機能するかの問題に終始し、箱式石棺の形態学的な研究には至らなかった（笹井1913・1915ａ・1915ｂ，喜田1915ａ・1915ｂ)。しかしながら、笹井氏は箱式石棺に緑泥片岩を使用することが阿波地域に限定されるという点を指摘し、石材に着目した観点から地域性を示したことによって、現在までの研究に与えている影響は大きい。

その後、調査によって石棺の発見例が増加するに従い、この種の形状が阿波特有のものではなく、全国的に分布することが知られるようになった。その為「阿波式石棺」の名は、研究初期段階の呼称であったとして使用されなくなった。

その後、小野真一氏によって箱式石棺の構造的な研究がなされている。小野氏は箱式石棺の概要を全国的に捉え、その分布と時期から箱式石棺の伝播の経路と画期を示した。更に、古墳の型式や副葬

品から被葬者層についても若干の考察を行っている。また、同論の中で駿河湾地方における箱式石棺をその材質・構造で分類し、考察も行っている。同氏はまず、石材を加工の有無などによって４つに分類し、また、構造形態の観点からは石室の有無・位置関係などから６つに分類した。この２つの分類の組合せのうち実在する14形式を整理して、各形式の時期について論じている（小野1960)。この研究において、箱式石棺の全国的な概観が整理されたのは大変重要な意義を持つ。しかし当時の各地域の遺跡調査状況などによって、その分布にはややばらつきが見られる点には、やはり注意が必要である。また、駿河湾地域における分類研究も、底石の有無と石棺の配置場所といった性格の異なる属性が同等に扱われ、分類に混乱が見られる。

その後、清家章氏はそれまでの箱式石棺研究における問題点を整理し、畿内周辺の箱式石棺において、細かな属性の持つ意味について検討を行った。その結果、長側石の数・棺の幅は階層差を示し、床面構造・小口形状は集団差を示すことを指摘した。また、清家氏は同一集団内から複数の保存状態のよい人骨を検出した例から、歯冠計測値を用いた集団の血縁関係の検討を行っている。それによって同一墳丘上に設置された同一形式の箱式石棺には血縁関係を有する集団が葬られた可能性が高いこと、また、同じ古墳群でも墳丘が分かれる場合やグループの分かれる場合があるが、その場合においても同一墳丘内やグループ内には血縁関係が認められることも指摘し、墓制としての箱式石棺の性格の一端を明らかにした（清家2001)。

（２）現状の問題点

箱式石棺は単純な構造のため、今までの研究において属性はその多くがすでに検討されている。しかし、熊本における研究の現状は『宮崎石棺墓群』（岩崎編1990）や『千崎古墳群第４次調査報告』（前田編2006）などの報告書内において、熊本県下における箱式石棺がまとめられている程度であり、地域性や社会性などを論じるまでに至っていない。この原因としては、資料の多くが盗掘もしくは破壊を受けている点や、その資料の多さと比べて発掘調査例や報告書の刊行が少ないという実情が挙げられる。また、例え調査報告がなされても、土器の副葬される例が少ないために古墳の時期の特定が難しく、時期の不明瞭なものが非常に多い点も大きな問題である。このことも現在までに熊本県内の箱式石棺があまり研究対象とされてこなかった原因の１つであろう。

しかしながら、現在熊本県内で箱式石棺とされるものは著者の知りうる限りで490基を数える。詳細を知りえないものは多いが、まずはこれらの分類と整理を行い、箱式石棺を副葬品や周囲の墓制だけに頼らない１つの墓制として、熊本の古墳時代の中に位置づける作業が必要であると考える。

２　分類

（１）属性の検討

今回の分析で取り上げる箱式石棺の属性は、使用石材、長側石構造、石棺の内法、棺床構造、小口構造の５つである。これらの属性は、すでに清家氏によって畿内周辺におけるその意味を明らかにされているが、今回熊本県内全域の箱式石棺を概観するに当たって、それらの特徴と意味が本地域においても当てはまるのかの検討を行う。

使用石材　熊本県内において、箱式石棺に用いられる主な石材は安山岩、凝灰岩、砂岩の３つである。大まかな地域ごとに見ていくと、宇土半島地域、天草地域、八代地域の宇土半島以南では砂岩の利用される例が最も多い。その他の地域では安山岩が広く用いられ、菊池川流域及び緑川流域の一

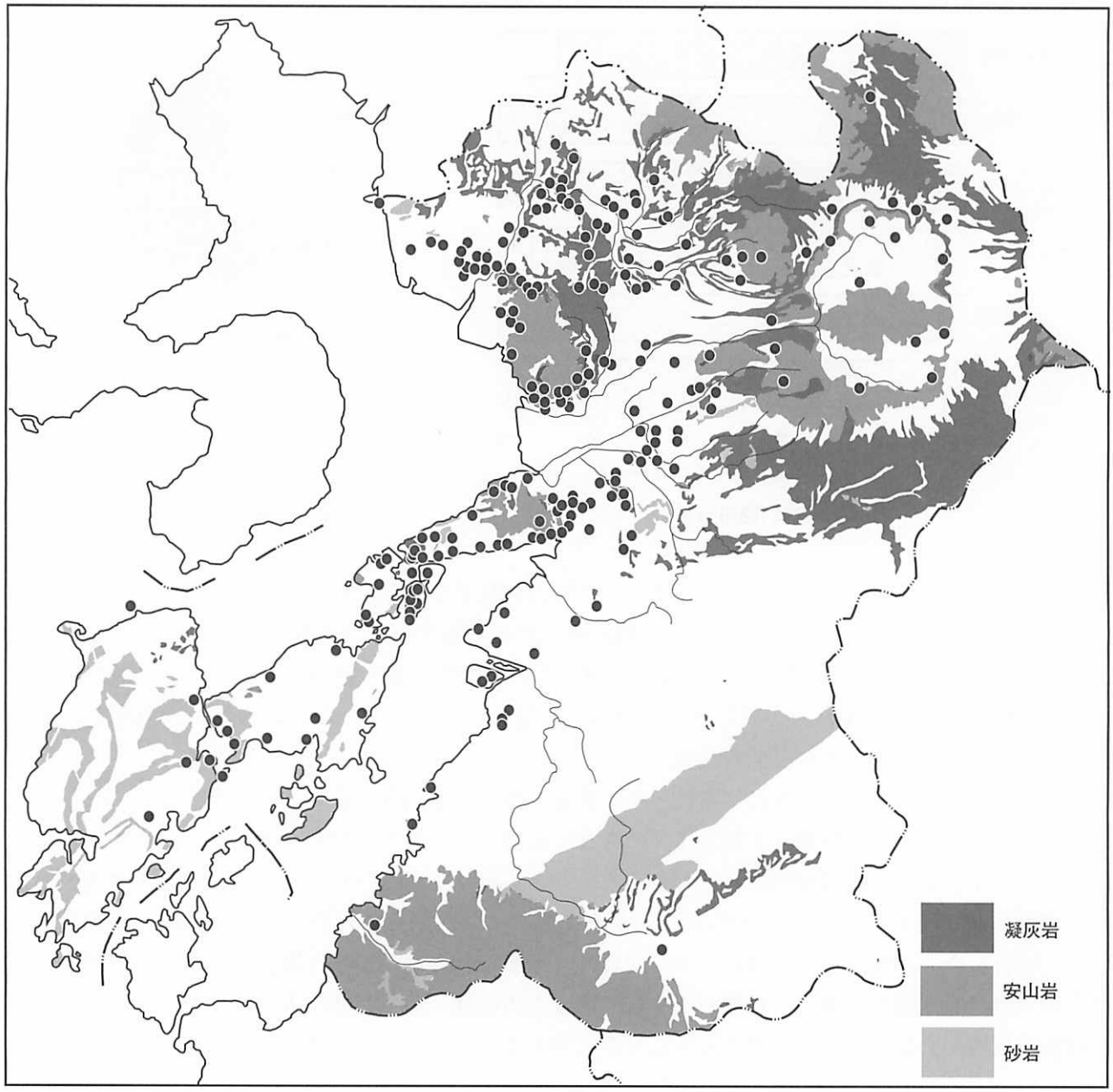

図１　熊本県古墳時代箱式石棺分布図及び表層地質図（図表参考文献22をもとに作成）

部では凝灰岩が集中的にみられる（図２）。天草は砂岩、菊池川流域と緑川流域は凝灰岩の産地であり（図１）、一般に言われる箱式石棺には在地の石材が主に用いられるという説と矛盾しない。

通常、同一遺跡内では同種の石材が統一して使用される傾向にあるが、下益城郡城南塚原の塚原古墳群のように、一部の石棺において異なった石材を用いて石棺を構成する例もある。また、宇土市三角大口の要４・６号石棺で見られるように、１つの石棺を構成するのに砂岩と凝灰岩などの異なる種類の石材を組合わせる例も存在する。しかしこのような場合においても、これらの箱式石棺で、周囲と構造的特徴や副葬品などの差異は見られない。

よって、使用石材に地域差といえる程の明確な差は無いといえる。後述するが、その石材加工上の特性によって、以下検討する箱式石棺の構造に影響を与えると考えられる。

長側石の枚数　　長側石の構造は、まず長側石に用いる石材の枚数によって、大きく２つに分けられる。１つは長側石に１枚の石材を用いるもの、もう１つは複数の石材を用いるものである。清家章

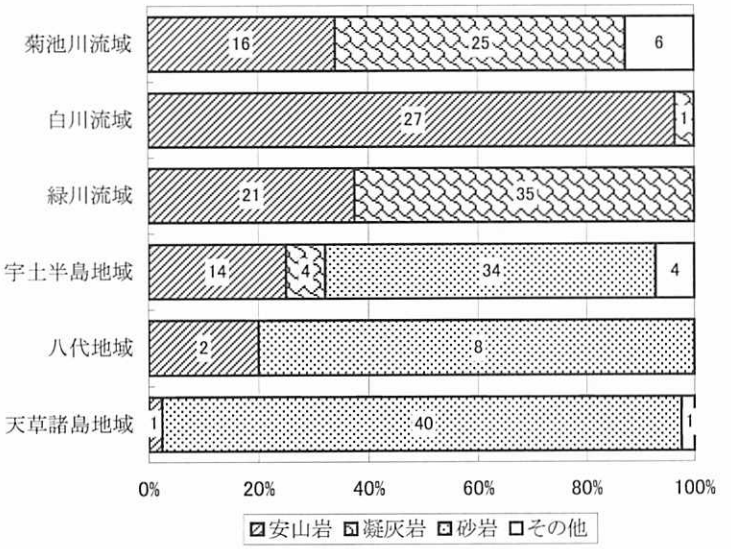

図２　地域別使用石材

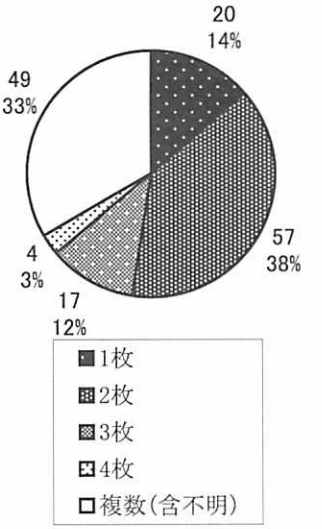

図３　長側石枚数の割合

氏にならい、前者を長側石１枚タイプ、後者を長側石複数タイプとする（清家2001）[(1)(2)]。

そこで、長側石の枚数を見ていくと、長側石を１枚の石材で構成する例は全体の14％である（図３）。一方長側石を複数で構成するものは、２枚のもので38％と最も割合が高くなり、３枚のものは12％、４枚のものは３％と、２枚以上は急速にその数を減じていく。これに複数とのみ報告される33％を加えると、実に86％が長側石複数タイプとなる。

古の人が、遺体を安置する棺に気密性・堅牢性を求めたのは知られるところであり、その２つが最も優れているのは、当然長側石１枚タイプである。長側石の枚数が２枚から３枚、４枚と増えるにしたがって、その数が急激に減少することからも、できる限り長側石の枚数を少なくしようとした意図が見て取れる（図４）。にもかかわらず、長側石１枚タイプが限られた存在であるのは、１枚で人身大以上の石材を入手することが困難であったためと考えられる。つまり、周辺で手軽に採取できる石材を組み合わせる場合と違い、長側石を１枚で賄うためには、ある程度の大きさの石材を入手し得る石材加工技術が必要とされるのである。これを支持するかのように、長側石１枚タイプには丁寧なつ

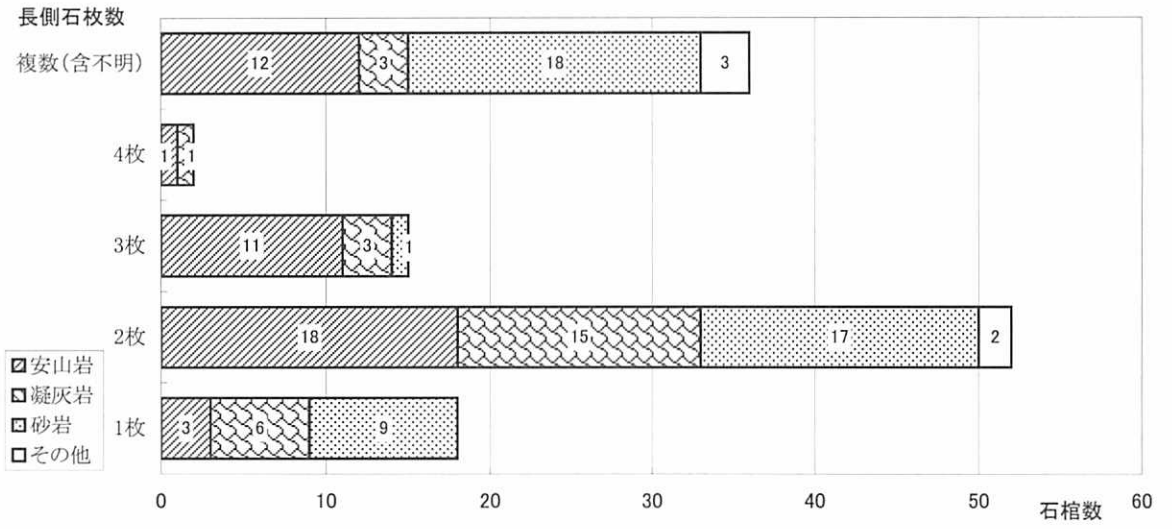

図４　長側石枚数と使用石材

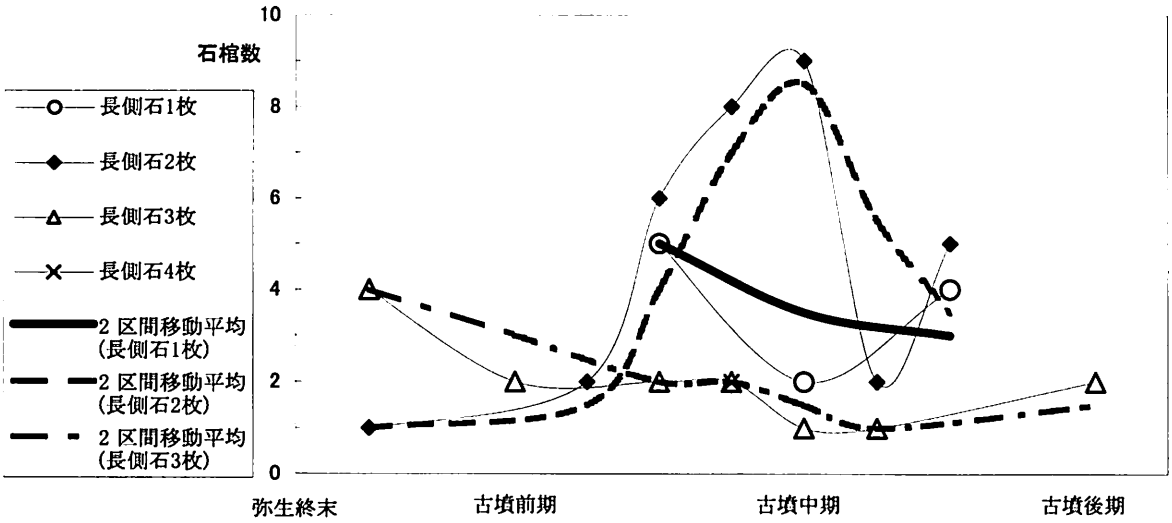

図5　長側石枚数の推移

くりのものが多い。その例を挙げれば、石棺の内傾を防ぐために小口石材を長側石の間に挟み込むように置くもの（後述するH字タイプ）や、さらに長側石の小口石材と組合せる部分に溝状の加工を施してその組合せをより強固にしたもの、石材に面取りを施すもの、蓋石の下面に棺身に合わせた溝状の加工を施すものなどである。また、蓋石に把手を持つものや、装飾円文を棺内に持つもの、副室を持つものなど、特徴的な要素を有するものも長側石1枚タイプに集中する。そこで一見すると、長側石の枚数という要素は、階層差を示しているかのように見える。しかし、一般に階層差を最も反映すると考えられる副葬品、墳丘について見てみると、少々事情が変わってくる。一部の長側石複数タイプにおいて、長側石1枚タイプを超える比較的豊富な副葬品を見ることができるのである。中でも、阿蘇郡一の宮中坂梨番出の番出古墳群1号石棺で仿製内行花文鏡、宇城市三角志水の磯山B号石棺で筒形銅器が出土するなど、長側石1枚タイプでは見られないものが見られる点は注目に値する。また、墳丘については、畿内周辺では長側石1枚タイプが、主として墳丘を有する古墳の主要な埋葬施設に用いられることから、特定個人墓として使用されたことが指摘されている（清家2001）。しかし、熊本地域においては墳丘を確認できないものや、複数かたまって石棺群を成すものも多い。よって、長側石複数タイプでも墳丘を有するものが散見される点を考慮すると、長側石の枚数に顕著な階層差が表れているとは言いがたい。つまり、長側石1枚タイプと長側石複数タイプの差異は、その殆どが技術的なものであって、分類の基準となるほどの明確な階層差を示しているとはいえないのである。石棺群を形成する場合でもその長側石の枚数が統制されないことを考えると、この技術差を集団差とするのも難しい。

なお、時期の推定される箱式石棺をみると、資料の偏りから波があって判断が難しいものの、時代が下るにつれて3枚のものは減少し、2枚のものが増加する傾向があるようである（図5）。長側石1枚タイプの初現は、古墳時代前期後半以降とされる八代市高島の高島古墳群2号石棺や上天草市大矢野千崎の千崎古墳群であり、それ以前には見ることができない。しかしその後増加を見せず、後期以降には姿を消すようである。よって長側石の枚数を、時期を考える際の参考にすることは可能かもしれない。

長側石の継ぎ方　次に長側石複数タイプの場合、その石材の継ぎ方に関しても考える必要がある。石材の継ぎ方は大きく3つに分けられ、石材の一部を重ね合わせるものを重継ぎタイプ、石材の端と

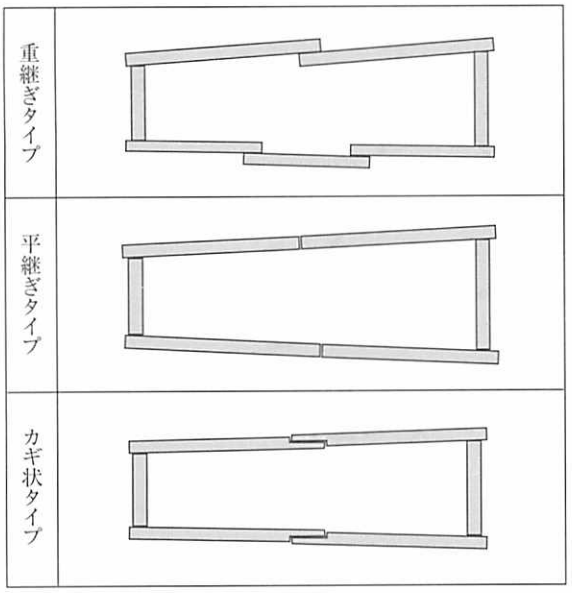

図６　長側石継ぎ方の分類

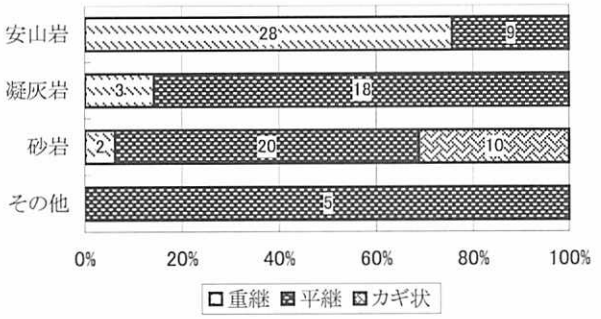

図７　石材別長側石継ぎ方

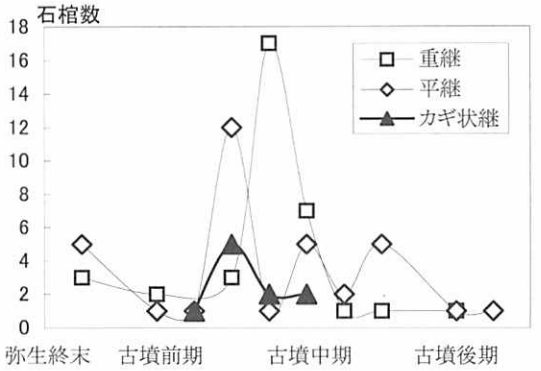

図８　長側石継ぎ方の推移

端を接するようにするものを平継ぎタイプ、石材の片方もしくは両方にカギ状の加工を施して、一部を重ねる様にしっかりと組合せたものをカギ状タイプとする（図６）[3]。

この観点にしたがい長側石の継ぎ方を細かく見ていくと、一定の地域でもその継ぎ方が遺跡ごとに異なったり、上益城郡御船秋只久保の久保遺跡や下益城郡城南塚原の塚原古墳群のように異なった継ぎ方が同一遺跡中に併存する例が見られる。このことは長側石の継ぎ方に明確な地域性・集団性が表れないことを示す。そしてこの３タイプの差は、やはり石材の違いに最も明確に表れる。安山岩製の箱式石棺では重継ぎタイプ、凝灰岩製では平継ぎタイプ、砂岩製では平継ぎタイプとカギ状タイプの２種類でその大半を占めるのである（図７）。

良質な安山岩は薄くはがれやすく、しかも硬く細かな調整が難しい。そのため、石材の端と端を合わせる平継ぎの手法では生じる隙間を解消することができず、石材の一部を重ね合わせる重継ぎの形態をとることになったものと考えられる。石材の継ぎ目に粘土目張りをする例がこの重ね継ぎタイプに多く見られるのは、石材のみで棺をうまく封鎖することができなかったがための次善の策であろう。また、凝灰岩の場合は、比較的柔らかく加工が容易であるため、比較的厚めの石材の端面を整えれば、平継ぎの形態をとっても隙間があまり生じなかったと考えられる。しかしながら、宇土半島以南に多い砂岩製箱式石棺の継ぎ方が、平継ぎタイプとカギ状タイプに偏るのは、こうした石材加工上の特性ばかりが原因であるとは考えがたい。というのも、天草周辺で産出する砂岩は硬砂岩であり、別段加工が容易であるとはいえないからである。にもかかわらず、加工を必要とする平継ぎタイプとカギ状タイプが主として用いられている。特に、平継ぎタイプよりも高い技術を要するカギ状タイプが砂岩製のものにしか見られないことは注目される。

カギ状タイプは、八代海沿岸の限られた地域でしか見ることができない。この丁寧な加工を必要とする特異な継ぎ方が、同じ石材、限られた地域でしか見ることができない背景には、特定の石工集団の関与を想定できないだろうか。同じく高い技術が必要とされる長側石１枚タイプの約半数が砂岩製であることにも注目しておきたい（図４）。

次に時期別に検討すると、重継ぎタイプ、平継ぎタイプ共に弥生終末から古墳時代を通して常にあり続けることが分かる（図８）。しかし、カギ状タイプだけは古墳時代前期後半の寺島古墳５号箱式石棺で初めて見られ、古墳時代中期までの限定された時期にしか見られない。これは先に述べた長側石１枚タイプの初現とほぼ重なっており、この出現には何らかの技術革新が伴ったものと思われるが、詳しくは分析の章で述べることとする。

カギ状タイプは、その例が６遺跡10例と非常に少なく、これが複数基まとまって見られるのは上天草市大矢野維和千崎の千崎古墳群のみである。つまり、カギ状タイプは極めて特殊な長側石の継ぎ方であるため、分類の要素としては不適切といえよう。よって、カギ状タイプ自体は宇土半島以南の限定された地域において、時期を示す参考程度にとどめたい。

石棺の内法（図９）　内法の長さを見てみると、最小のもので70cm、最大のもので360cmとかなりの幅を持つが、その80％以上が140cmから210cmの間に集中する。そこでその間のものを標準長タイプ、140cmを下回るものを小型タイプ、210cmを上回るものを大型タイプとして、以下検討を行う。

まず140cm未満の小型タイプの箱式石棺では、必要とする石材の大きさが小さくなるため、長側石１枚タイプの割合が大きくなることが予想される。しかし実際には、こうした小型タイプの中でも、長側石１枚タイプは、下益城群城南塚原の塚原古墳群12号石棺と宇城市三角大口の要１号石棺の２例のみである。これは小型タイプの約12％であり、全体で見た場合の13％と大差ない。単純に考えて、標準長タイプの長側石石材を、最も例の多い長側石２枚で構成すると仮定すれば、石材１枚の大きさは約70cmから105cmとなる。このサイズの石材を確保する技術が一般的であったならば、もっと多くの長側石１枚からなる小型タイプが見られてもおかしくはない筈である。にもかかわらずその大部分を長側石複数タイプが占めるのには、何らかの理由があったと思われる。こうした小形の箱式石棺における埋葬には、被葬者が未成年である場合、被葬者の埋葬姿勢が屈葬である場合、一度埋葬した後に集骨した改葬である場合が考えられる。しかし小型タイプから人骨が出土した例は、方保田石棺において臼歯３・犬歯１を検出したと報告されるのみで、出土人骨から判断を下すことはできない。そこで個々の小型タイプを見ていくと、その多くが加工のない作りの荒いもので、また副葬品も乏しいことに気づく。屈葬は呪術的意味合いの強い埋葬姿勢とされ、そこに副葬品の乏しいことには違和感

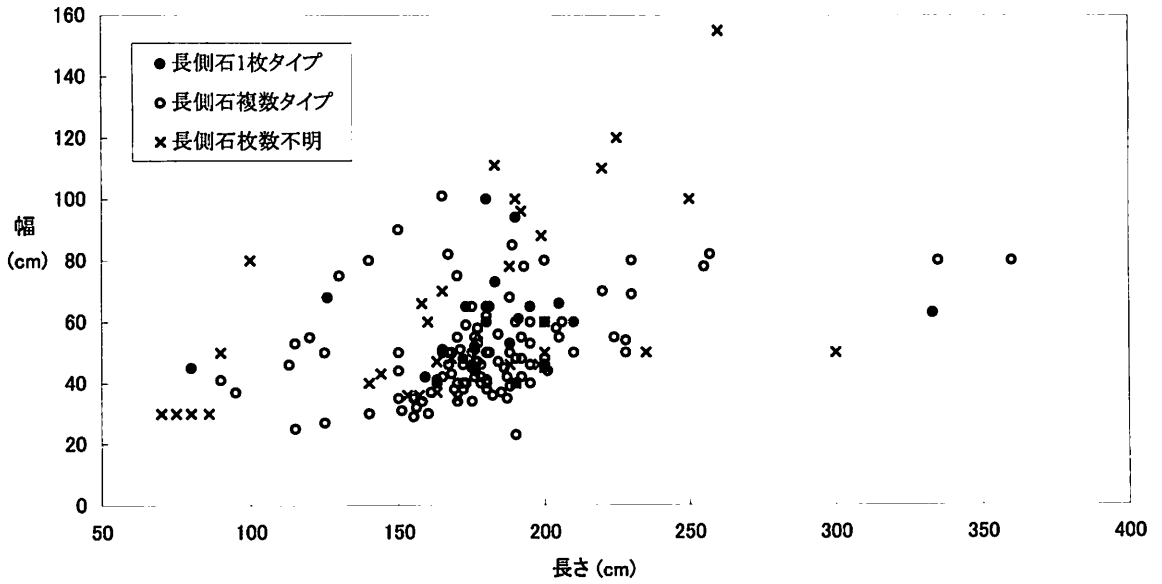

図９　長側石枚数と内法

を覚える。また、改葬の場合はその棺の製作に時間的猶予があるからその作りの荒さに違和感を覚える。被葬者が未成人であり不慮に亡くなったと考えてみると、埋葬の準備が万全ではなく副葬品の乏しいことに一応の説明がつく。

次に、210cmよりも大きい大型タイプの箱式石棺について見てみると、こちらは当然大きな石材が必要になる。しかし、３ｍを越える巨大な阿蘇郡一の宮手野の丸山石棺では長側石１枚タイプが採用されている。大型タイプはただ遺体を安置するには不必要なまでの長さを持ち、あらかじめ追葬を前提として築かれたようにも思える。しかし、現在出土している人骨からは、標準長タイプと大型タイプに埋葬された人々の数に顕著な差を見出すことは出来ない。また、熊本市釜尾福寺の堂手石棺群のように大型タイプが固まって存在する例もあるが、その多くは石棺群の中でも突出した長さを持つものである。副葬品では宇城市三角志水の磯山Ｂ号石棺から筒形銅器が出土するなど、石棺自体の規模と合わせて大型タイプは階層的に上位にあるように思われる。しかし、その大型タイプ内でも個々の内法の長さの差が極めて大きいこと、墳丘の有無にも特徴的な点は見られないことなどを合わせて考えると、その根拠は薄いといえよう。以上の検討から、箱式石棺の内法の長さに被葬者の年齢などの個人差以上の階層性・集団性を見ることはできなかった。

なお、寺田正剛氏は長崎県域の縄文時代から弥生時代にかけての箱式石棺の変遷を追う中でその長大化の傾向を指摘している（寺田2005）が、今回検討した限りでは小型タイプ・標準長タイプ・大型タイプのどれも古墳時代を通じて見られ、時期的な変遷は認められない。

次に、内法の幅を見てみると、最も狭いもので23cm、最も広いもので155cmとやはり幅を持つが、その67％が60cm未満である。よって幅60cm未満の標準幅タイプと、幅60cm以上の幅広タイプに大別する(4)。

幅広タイプは、小型タイプから大型タイプまでその長さはさまざまであるが、長側石１枚タイプの割合が標準幅タイプでは５％であるのに比べて、幅広タイプでは30％と大幅に大きくなる。つまり畿内周辺の例と同様（清家2001）に、熊本の箱式石棺も長側石１枚タイプは棺の幅の広いものと多く共通する。つまり、その幅の広いものは、規模も大きい傾向にあるといえる。しかし、熊本県の箱式石棺においては長側石１枚タイプが階層的に上位であると明確に判断することはできない点、墳丘の有

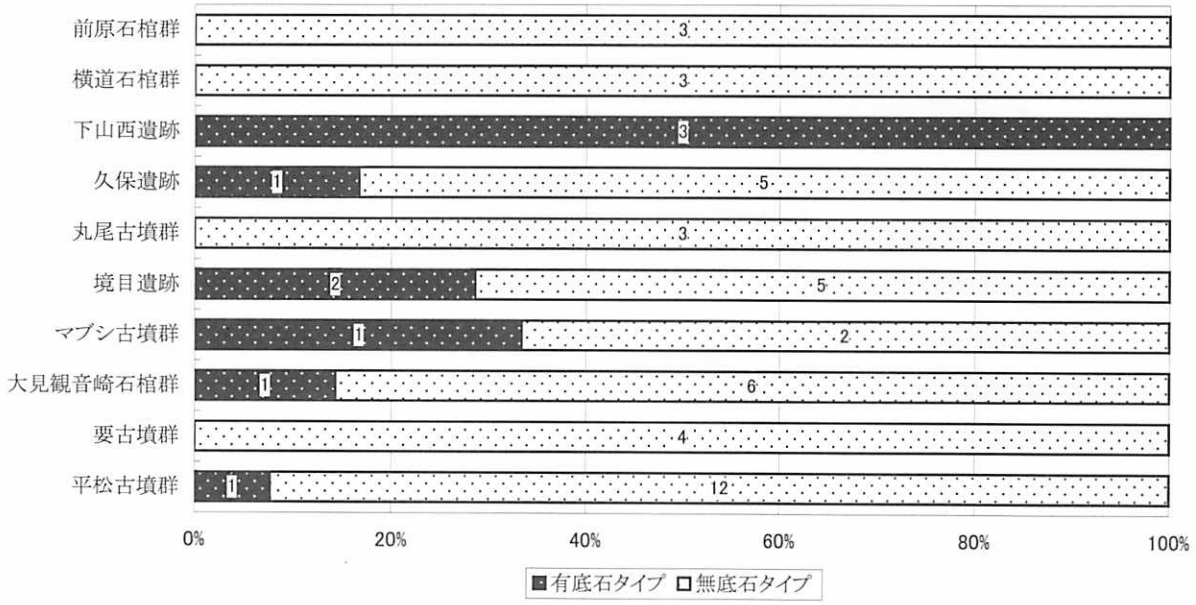

図10　遺跡別棺床構造の割合

無や副葬品に大きな差は見られない点など、棺の幅を階層差を示す分類基準とするには問題が残る。

なお、標準幅タイプ・幅広タイプ共に古墳時代を通して見られ、時期的な変遷は認められない。

棺床構造　箱式石棺の棺床の構造には板石のもの、板石と礫を同時に持つもの、板石と粘土を同時に持つもの、礫のみを持つもの、粘土層を持つもの、単に地山を整形しただけのものなど多様な種類がある。そこで、清家章氏の分類にならい、これらを板石の有無で、有底石タイプと無底石タイプの２つに分ける（清家2001）[5]。

通常棺床構造は、発掘調査が行われるか、遺跡が破壊された場合にしかその構造が判明しないため、その例がやや乏しい。また、その７割以上を無底石タイプが占める。しかし、３基以上の棺床構造が明らかな石棺群で見ていくと、そのほとんどが、有底石タイプか無底石タイプのどちらかに大きく偏る（図10）。特に、少数派の有底石タイプで、例外なく統一された遺跡が存在することには注目するべきだろう。よって、底石の有無は、集団差を示すものとしてよいと思われる。但し、今回の検討では、半数の10例中５例に１・２基の例外となる棺床構造が存在しており、畿内周辺よりも厳密性という点では劣るといえる。福永伸哉氏は弥生時代木棺墓の研究の中で、多数派に混じって少数存在する例外に、出自の違いが存在することを指摘している（福永1985）。これを踏まえると、今回の検討における例外の多さは、地方での集団交流がより活発であった事を示しているのかもしれない。また、これらの例外と多数派の間に、棺床構造以外の差は特に見られなかった。そして、同一古墳群中の墳丘単位で棺床構造が異なった例が無かったため、棺床構造に表われる集団差が墳丘単位のものであるかは確認することはできなかった。

小口構造　小口構造についても清家章氏の分類にならい、長側石で短側石を挟むものをＨ字形タイプ、長側石を短側石で挟むものをⅡ字形タイプ、このどちらかの明瞭でないものは、全て一括してロ字形タイプとする（図11）（清家2001）。よって、両端において小口構造が異なることが明らかな場合もロ字形タイプに含めた[6]。

さて、熊本県の３基以上小口構造の明らかな石棺群の様相を見ていくと、ほとんどの場合Ｈ字形タイプ、Ⅱ字形タイプ、ロ字形タイプのどれかに偏る傾向が見られる（図13）。Ｈ字形タイプに偏るものが多いのは、元々熊本県内ではその約７割をＨ字形タイプが占めるためだろう（図12）。Ｈ字形タイプの一部には、長側石に溝状の加工を持つものや、副室を持つものが認められるが、これらはかなり限定された存在である。分布や構造の特徴を見出すことは出来ず、これをもって分類の属性とすることはできない。

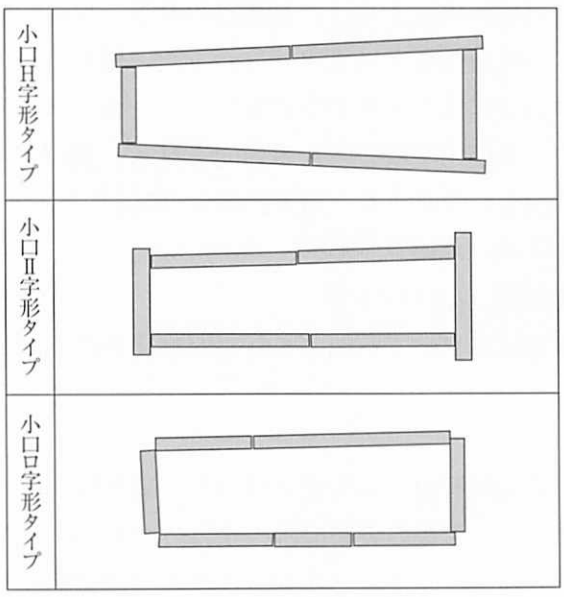

図11　小口構造の分類

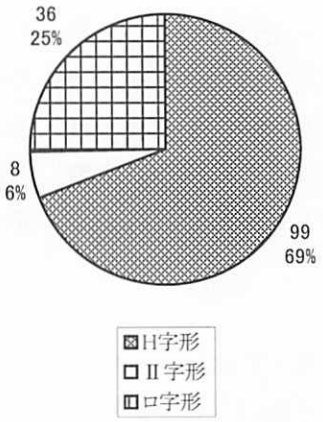

図12　小口構造の割合

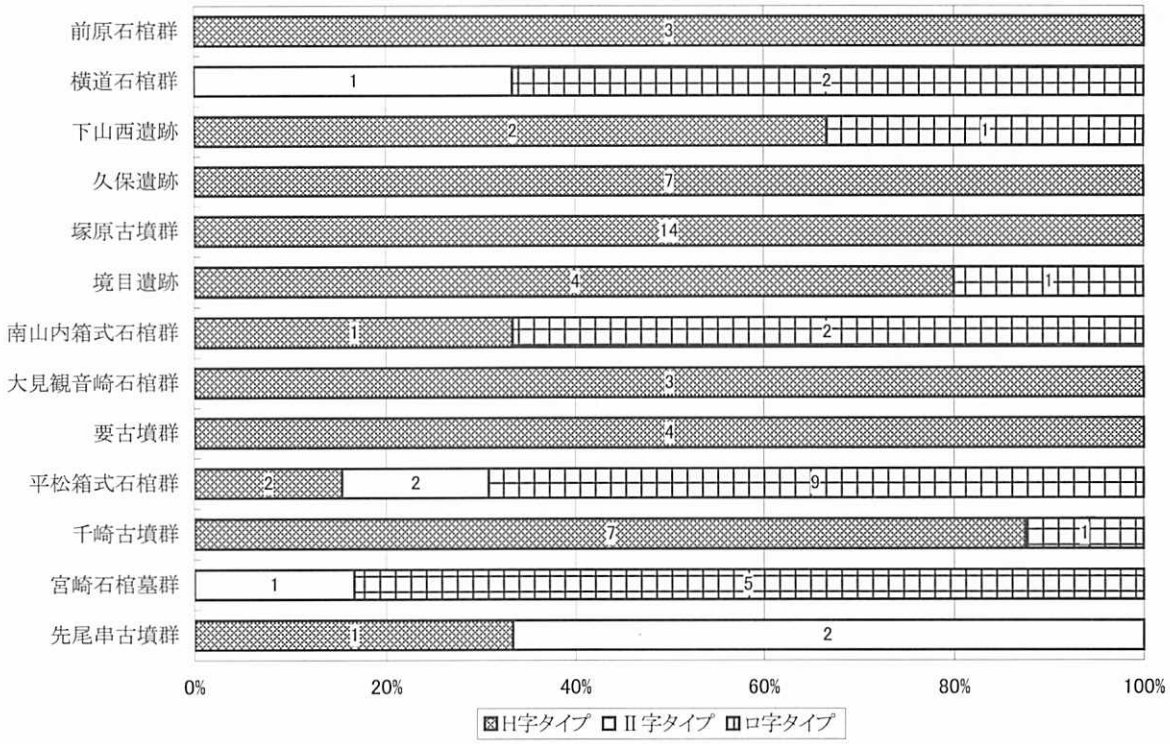

図13　遺跡別小口構造の割合

また、Ⅱ字形タイプ・ロ字形タイプにおいても石材やその他の構造的差異は認められず、それぞれの副葬品・時期にも差がない。よって、小口構造は、集団差を示すものとしてよいと考えられる。但し、小口構造が完全に統一されない割合は、13例中８例と棺床構造よりも割合が大きくなり、その集団の厳密性は棺床構造よりも劣ると考えられる。

（２）型式の設定

今回熊本県の箱式石棺において各属性を検討した結果、まず使用石材から強い地域的特色は見られなかった。次に、長側石構造と石棺の内法からは、長側石の枚数・棺の幅共にその製作技術では相対的に上位の傾向は示すものの、明確な階層差は見出せなかった。但し、長側石１枚タイプとカギ状タイプが、共に古墳時代前期後半頃に出現する様相を見せている。棺床構造・小口構造は畿内周辺よりも厳密性という点で劣るものの、集団内で統一される傾向を見せ、集団差を示すことが確認された。よって、これも清家章氏の型式設定にならうが（清家2001）、集団差を示すものとして、

有底石－小口Ｈ字型、小口Ⅱ字型、小口ロ字型

無底石－小口Ｈ字型、小口Ⅱ字型、小口ロ字型

以上６つの型式分類で、熊本県地域において石棺墓を営んだ集団の動向について分析を行う。

３　分析

前章において、熊本県における箱式石棺の各属性を検討し、集団性を表す属性として棺床構造と小口構造の２つを抽出し得た。よって、以後の考察では、主にこれらの型式を識別できる86基から、集団とその繋がり、動向を見ていくことにする。しかし、これだけでは例が少なく不安が残るため、その他の属性や型式の明らかでないもの、墳丘や副葬品なども参考としている。なお、以下簡略化のため、有底石型（小口Ｈ字型）をＡⅠ型、有底石型（小口Ⅱ字型）をＡⅡ型、有底石型（小口ロ字型）

をＡⅢ型、無底石型（小口Ｈ字型）をＢＩ型、無底石型（小口Ⅱ字型）をＢⅡ型、無底石型（小口ロ字型）をＢⅢ型とする。但し、古墳群・石棺群を形成する場合、少数型式が含まれて例外が生じる場合があるので、その中でもっとも多い型式をその遺跡の型式とした。同数の場合はその傾向を見ることができないため除外した。

（1）各型式の分布

まずは各型式の分布を見ていくことにしよう（図14）。ＡＩ型は熊本県内の箱式石棺が分布する地域全体に広く分布し、阿蘇山周辺に若干のまとまりがある。ＡⅡ型とできるものは天草諸島上島の宮崎石棺墓群のみである。ＡⅢ型も少なく、玉名市岱明の大原遺跡と玉名郡玉東町木葉町下の天神山古墳、宇土市松山の南山内石棺群の３つである。これら３つの遺跡は距離的に離れており、他の共通点も見られない。ＢＩ型は最も数が多く一般的な型式である。熊本北部地域及び熊本中部地域、とりわ

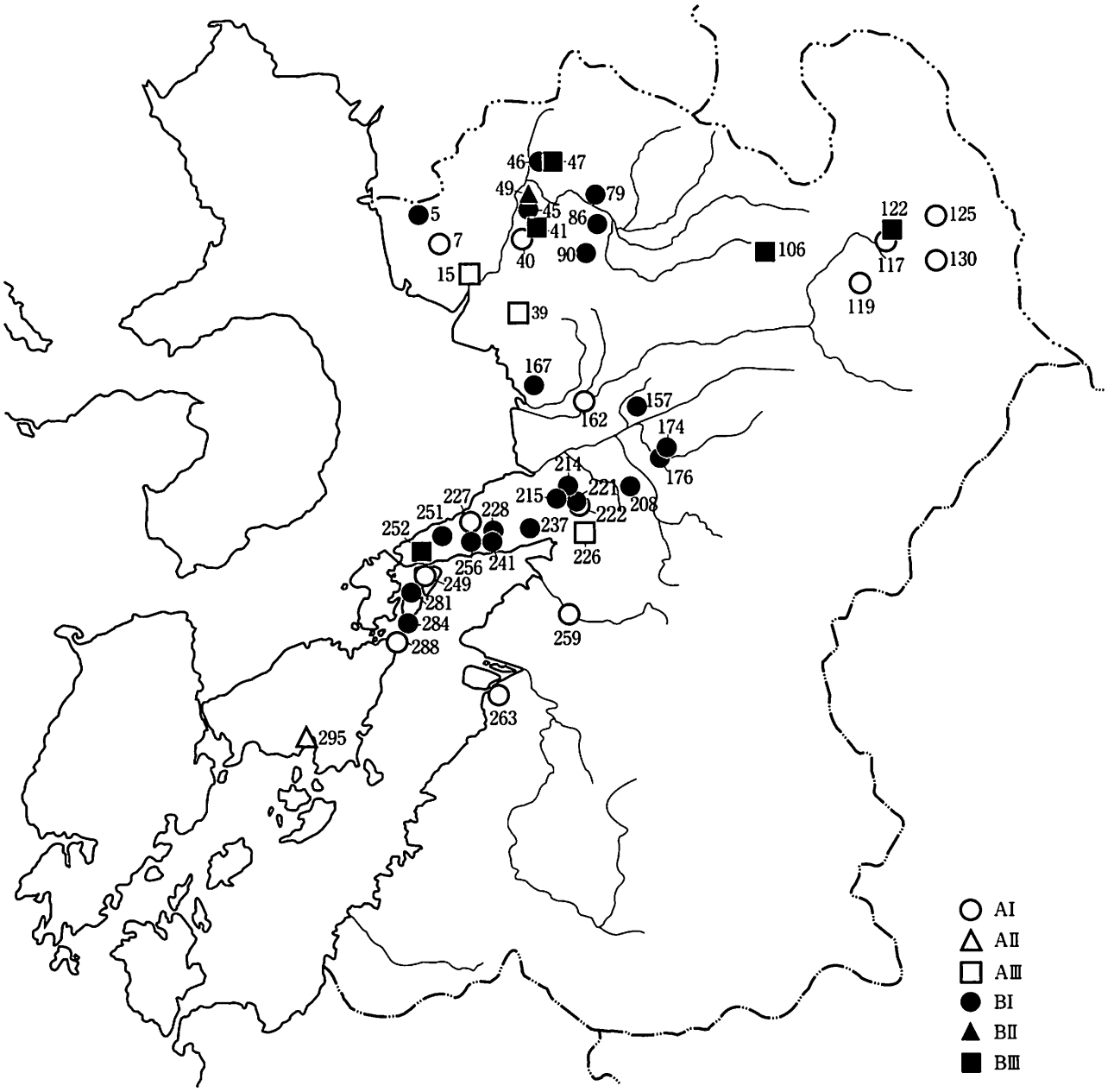

図14　型式別箱式石棺分布図

表１　阿蘇周辺でＡＩ型が主体となる遺跡

No.	遺跡名	所在地	型式	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	床石	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	石継ぎ	副葬品出土遺物	備考	推定時期	文献
117	本村石棺	阿蘇市小野田村下	ＡＩ		170	75	有	安山岩	複	H	×	重	土師器	棺外より完形土師器２個	古墳中期前半	4
119	下山西遺跡１号石棺	阿蘇市乙姫下山西			80	30		安山岩					ガラス玉	赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23
	下山西遺跡２号石棺		ＡＩ		181	50	有	安山岩	3(1)	H	×	重	短剣	人骨　赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23
	下山西遺跡３号石棺		ＡＩ		176	55	有	安山岩	3+3(1)	H	×	重	鉄剣	人骨　棺内に粘土を塗った上に赤色顔料を塗布　周辺より重弧文を持つ長頸壺出土	弥生末～古墳初頭	23
	下山西遺跡４号石棺		ＡⅢ		188	50	有	安山岩	3(1)+3(1)	東：H 西：ロ	×	重	鉄剣	赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23
125	丸山石棺	阿蘇郡一の宮手野	ＡＩ	○	333	63	有	安山岩	1+2	H	○	平		赤色顔料　蓋石に溝あり		8
130	番出古墳群１号石棺	阿蘇郡一の宮中坂梨番出	ＡＩ	○	180	50	有	安山岩	2+2(1)	H		重	仿製内行花文鏡、直刀、鉄剣、竪櫛	人骨に赤色顔料付着	古墳中期	4

表２　宇土半島基部周辺でＢＩ型が主体となる遺跡

No.	遺跡名	所在地	型式	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	床石	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	石継ぎ	副葬品出土遺物	備考	推定時期	文献
214	古保里１号石棺	宇土市古保里南五器田	不明					安山岩	複		×		鹿角製刀子　櫛	古保里箱式石棺群　人骨出土　蓋石四枚		50
	古保里２号石棺		不明		161	37	無	砂岩切石	複		×		短剣、鏃、硬玉製勾玉、珠文鏡	古保里箱式石棺群		50
	古保里３号石棺		ＢＩ		176	47	無	安山岩割石	2+3	H	×	重	鉄剣、鉄鏃、鏃	古保里箱式石棺群　人骨３体　両端に粘土枕	古墳中期前半	50
215	境目１号石棺	宇土市境目西原	ＢＩ		163	41	無		3+3	H	×	重	鉄鏃	境目石棺群　人骨１体	古墳中期前半	50
	境目２号石棺		ＢＩ		175	34	無		複	H	×	重		境目石棺群　人骨２体	古墳中期前半	50
	境目３号石棺		不明		168	43	有		複		×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
	境目４号石棺		ＢＩ		155	29	無		複	H	×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
	境目５号石棺		不明				無						小玉	境目石棺群　枕石	古墳中期前半	50
	境目６号石棺		ＢⅢ		177	58	無		複	ロ	×	重	小玉片	境目石棺群　人骨３体　枕石（朱）	古墳中期前半	50
	境目８号石棺		ＡＩ		158	34	有		複	H	×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
221	西潤野古墳２号石棺	宇土市立岡西潤野	ＢＩ		90	41	無	凝灰岩	2	H		平			古墳中期	30

け宇土半島周辺にその分布が濃密である。ＢⅡ型は玉名郡和水下津原上原の上原石棺で見られる他には、石棺群中の例外として少数見られたのみである。ＢⅢ型は玉名郡和水下津原上西原の下津原上西原箱式石棺、玉名郡和水江田上土喰の江田土喰１号石棺、菊池市旭志の横道石棺群、阿蘇市南宮原の源太ヶ塚箱式石棺、宇城市三角の平松箱式石棺群と、距離的にやや離れた５遺跡である。

各型式に明確な分布の違いを見出すことはできないが、ＡＩ型が阿蘇周辺で、ＢＩ型が宇土半島基部から上天草に至るまでに、ややまとまって見られた。そこで、それぞれのグループについてもう少し詳しく見ていくことにする。

阿蘇周辺のグループ　ＡＩ型を主体とする阿蘇周辺のグループは、本村石棺、下山西遺跡、丸山石棺、番出古墳群１号石棺の４遺跡７基からなる（表１）。いずれも安山岩製で、本村石棺を除く６基の内部には赤色顔料がまかれている。下山西遺跡４号石棺のみがＡⅢ型であるが、この石棺の東側小口は明らかなＨ字型であり、石材の大きさの問題で西側小口はロ字型となったと思われる。副葬品は鉄剣、短剣や長頸壺が出土している。丸山石棺は非常に長大な形状で、長側石は１枚のものと、安山岩製では珍しい平継ぎの手法を用いたものからなる。また、長側石には小口部分に溝状の加工を施し、蓋石の裏面にも同様の加工が施されている。副葬品では土師器、鉄器、鏡などが出土している。番出古墳群１号石棺は、棺材に調整のための敲打痕が残る。副葬品は仿製内行花文鏡、直刀、鉄剣、竪櫛が出土している。このグループ内で、副葬品に関して共通する点は特に見られない。丸山石棺を

表3　宇土半島・上天草周辺でＢＩ型が主体となる遺跡

No.	遺跡名	所在地	型式	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	寸法(内法)(cm) 幅	床石	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品出土遺物	備考	推定時期	文献
228	大見観音崎古墳1号石棺	宇城市不知火大見観音崎	ＢＩ		183	73	無	凝灰岩	1+1	H	○			大見観音崎石棺群 赤色顔料 蓋に把手	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳2号石棺		不明				無	砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳3号石棺		不明				無	安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳4号石棺		ＡＩ		180	41	有	砂岩	複	H		重	刀子	大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳5号石棺		不明		100	80	無	安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳6号石棺		ＢＩ		235	50	無	砂岩		H				大見観音崎石棺群 赤色顔料	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳7号石棺		不明					砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳8号石棺		不明					安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳10号石棺		不明					砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期～後期	16
	大見観音崎古墳11号石棺		不明		195	46	無	頁岩 安山岩	複					大見観音崎石棺群 赤色顔料 周辺より鏃先検出	古墳中期～後期	16
237	東塩屋浦古墳	宇城市不知火東塩屋浦	ＢＩ	○		45	無	砂岩		H	○		直刀	人骨 二段床は追葬時？蓋石溝状加工(丹)		24
241	要1号石棺	宇城市三角大口	不明		80	45		砂岩	1+2	H	×			要古墳群	古墳中期～後期	21
	要2号石棺		不明					安山岩						要古墳群	古墳中期～後期	21
	要3号石棺		ＢＩ		175	46	無	砂岩	2+2(1)	H		平		要古墳群 人骨 赤色顔料	古墳中期～後期	16
	要4号石棺		ＢＩ		176	44	無	凝灰岩 砂岩	2(1)+2(1)	H	×	平	刀子	要古墳群 赤色顔料 人骨3体	古墳中期～後期	16
	要5号石棺		ＢＩ		165	42	無	砂岩	2+2(1)	H	×	平	碧玉製管玉	要古墳群 人骨2体 赤色顔料 枕石 頭骨 蓋石に溝状加工 側石面取	古墳中期～後期	16
	要6号石棺		不明				無	砂岩 頁岩						要古墳群	古墳中期～後期	16
251	金桁古墳群1号墳	宇城市三角中村前田	ＢＩ				無	砂岩	2+2	H			直刀、勾玉、土器	金桁古墳群 人骨5体 赤色顔料		57
256	御船古墳1号石棺	宇城市三角里浦	ＢＩ		177	53	無	砂岩	2(1)+2(2)	H	○	カギ状		棺外より刀子 人骨2体 蓋石に溝状加工 赤色顔料	古墳中期	57
281	千崎古墳8号墳	上天草市大矢野維和千崎	不明		195	65		砂岩	1	H	○	カギ状		千崎古墳群	古墳前期～中期	59
	千崎古墳9号墳		不明		204	58		砂岩	2(1)+2(1)	H	○	カギ状		千崎古墳群 蓋石に溝状加工	古墳前期～中期	59
	千崎古墳10号墳		ＢＩ		172	48	無	砂岩	1+2	H	○	カギ状		千崎古墳群 人骨4体 赤色顔料 棺外より鉄斧、刀子、鎌、直刃鎌 蓋石に溝状加工 加工痕	古墳前期～中期	59
	千崎古墳13号墳		不明		184	56		砂岩	2+2	H	○	カギ状	鉄剣、刀子、ガラス小玉	千崎古墳群 棺外より鉄剣 蓋石に溝状加工	古墳前期～中期	59
	千崎古墳15号墳		不明		178	42		砂岩	2+2	H	○	重		千崎古墳群 赤色顔料	古墳前期～中期	59
	千崎古墳16号墳		不明			70		砂岩		H				千崎古墳群	古墳前期～中期	59
	千崎古墳17号墳		不明					砂岩						千崎古墳群 石材上面に面取り加工痕	古墳前期～中期	59
	千崎古墳20号墳		不明				無	砂岩	1		×			千崎古墳群 加工痕	古墳前期～中期	59
	千崎古墳21号墳		不明		163	47		砂岩						千崎古墳群	古墳前期～中期	59
	千崎古墳22号墳		不明		173	65		砂岩	1+1	H (副室:ロ)	○			千崎古墳群 副室を持つ 面取り加工痕	古墳前期～中期	59
	千崎古墳25号墳		不明		86	30		砂岩 安山岩			×			千崎古墳群	古墳前期～中期	59
	千崎古墳26号墳		不明		176	51		安山岩 割石	2	北:H 南:ロ	×	カギ状		千崎古墳群	古墳前期～中期	59
284	広浦古墳	上天草市大矢野千束広浦	ＢＩ	○	191	61	無	砂岩	1+1	H	○		鉄刀	赤色顔料 周辺より装飾ある石材 人骨		28

除いた3遺跡では年代が推定され、下山西遺跡が弥生終末期、本村石棺が古墳中期初頭、番出古墳群1号石棺が古墳時代中期であるとされている。よって年代的推移に関しても少なくとも直接の系譜は考えにくい。よって、この阿蘇周辺のグループに地域性を見出すことは出来ない。

次にＢＩ型で見られた宇土半島を中心とするまとまりについてみて行く。このまとまりは更に宇土

半島基部の西潤野古墳２号石棺、古保里箱式石棺群、境目石棺群の３遺跡と、宇土半島・上天草の東塩屋浦石棺、大見観音崎石棺群、要古墳群、御船古墳群、金桁古墳群、千崎古墳群、広浦古墳の７遺跡に分けられる。

宇土半島基部周辺のグループ　宇土半島基部周辺のグループは、ＢＩ型６基に加えて、ＡＩ型１基、ＢⅢ型１基、型式不明のもの４基の計11基からなる（表２）。これらを見ていくと、まずＢＩ型の石棺は長側石に溝状の加工を施さないという点では共通しているが、やはり各遺跡によって石材や墓壙の掘り方といった相違点が見られる。同遺跡中でも型式の異なるもの、不明なものを含めて見ても、他の共通点は見出せない。また、一見すると長側石枚数が複数であり重継ぎが目立つが、石材が不明のものが多いため、これがこのグループにおける特色であると断言することもできない。よってこのグループも地域性を形成するには至っていない。

宇土半島・上天草周辺のグループ　続いて宇土半島・上天草周辺の７遺跡からなるグループを見ていく。このグループはＢＩ型10基に加えて、ＡＩ型１基、型式不明21基の計32基からなり（表３）、型式不明の比率が高いが比較的資料が多い。まずＢＩ型のものだけを見ていくと、いずれも棺内から赤色顔料が検出されている。また、かなりの割合で人骨、それも複数の人骨が出土している。これは追葬が行われたためと考えられ、特に追葬時の遺体を、初葬の遺体と逆の向きに配置する対置埋葬の傾向が見て取れる。また、人骨の出土していない東塩屋浦古墳でも、長側石石材に棺床の痕跡がはっきりと２段に残っており、追葬が行われた可能性が高い。対置埋葬という配置の持つ意味はいまだ明らかでないが、少なくとも配置としてそう珍しいものではない。しかし、遺跡間を越えてこうした共通の埋葬習俗が見られることから、少なくとも宇土半島・上天草地域において、各遺跡を営んだ集団間に交流があったと考えるべきであろう。つまり、ＢＩ型を主とする墓制の集団によって、宇土半島・上天草地域に地域性が形成されていたことが想定されるのである。また、棺内に赤色顔料を用いることや、複数埋葬を行うというほどの高い共通性は見せないものの、これらＢＩ型では石材に精緻な加工を施したものが多い。この傾向は型式の不明なものを含めてみてみると、なおさら顕著なものとなる。現在熊本県内で長側石に溝状加工を有するものは303遺跡490基中17遺跡25基、石材の継ぎ方がカギ状タイプであるものは６遺跡10基しか確認できない非常に限定された存在である。しかしこのグループにおいて長側石に溝状加工を施したものは５遺跡10基、石材の継ぎ方がカギ状タイプであるものは２遺跡６基存在する。また、長側石１枚タイプのものも、32基中７基で21％と、全体での割合14％よりも高くなる。更に蓋石の下面に棺身に合わせた溝状加工を施したものも多い。これら丁寧な石材加工技術の集中は、この地域に優れた石材加工技術を有した集団が存在したことを考えさせるに十分である。そして、このように丁寧に加工された箱式石棺を用いた傾向のある６遺跡のグループの中でも、突出した割合でそれが見られるのが上天草市大矢野維和千崎の千崎古墳群である。

（２）千崎古墳群

千崎古墳群の評価　千崎古墳群は天草諸島の北東に浮かぶ維和島の北端、頂点からＴ字状に３方向に伸びる千崎丘陵上に築かれた古墳群である。箱式石棺12基、石室を持つと考えられる古墳14基からなる。自然の地形を利用し、いくつかある丘陵の頂部には全て箱式石棺が築かれていることから、箱式石棺墓が石室を持つ古墳に先行すると考えられる。多くの箱式石棺は砂岩製である。詳細不明や例外もあるが、半数以上は長側石に溝状加工を持ち、長側石を継ぐ場合はカギ状タイプである。蓋石の残存するものでは下面に溝状加工が施されている場合が多い（図15－１）。副葬品としては、千崎

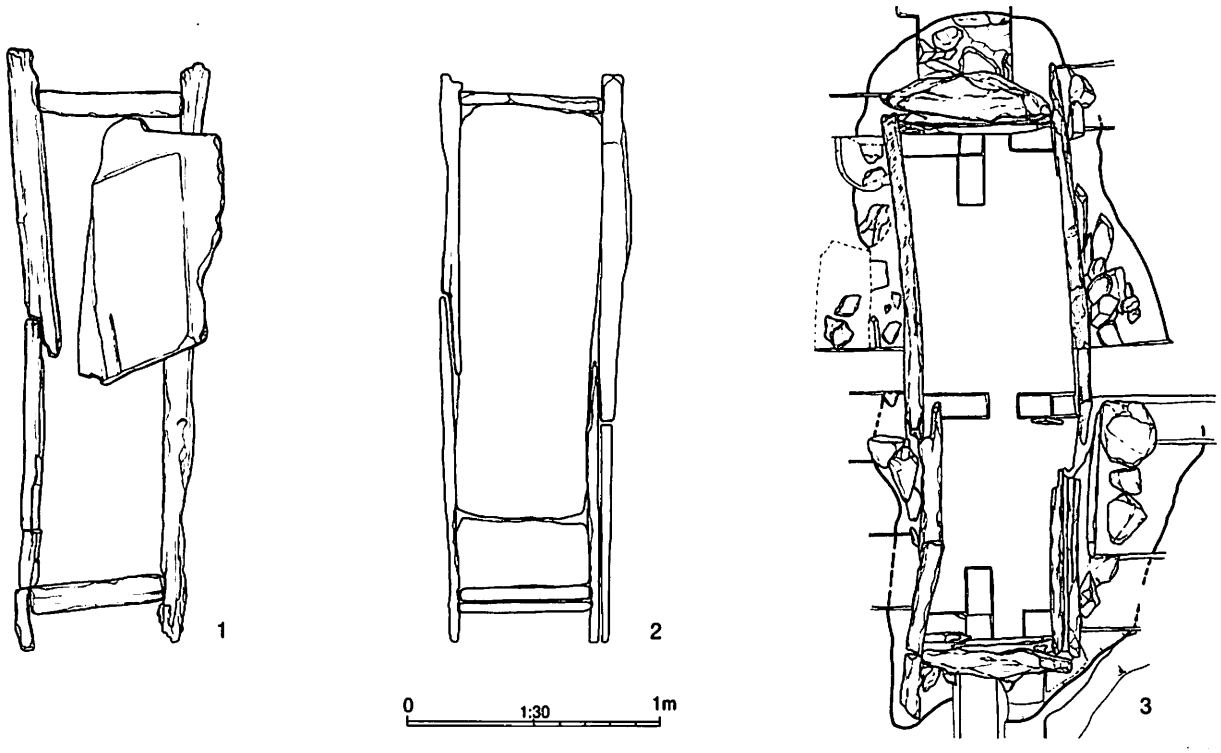

図15　千崎型箱式石棺の諸例（Scale：1/30）
1：千崎13号墳，2：室の山古墳2号石棺，3：奥山古墳

10号墳の棺外より袋状鉄斧・刀子・鉋・直刃鎌からなるミニチュア鉄器セットが出土しており、時期は古墳時代前期後半から中期前半にかけてと推定される。

前章で述べたように、長側石1枚タイプの初現は古墳前期後半から中期前半、カギ状タイプと長側石に溝状加工を施すもの出現は前期後半頃で、ちょうど千崎古墳群で箱式石棺が築かれた時期とほぼ重なる。これらが見られる石棺では、いずれも石材加工の痕跡が残されており、おそらくはチョウナ削り・チョウナ敲きの技法を用いたと考えられる。同じ道具を用いる技術が一定地域でほぼ時期を同じくして、いくつも独自発展して確立するとは考えにくい。よって、やはり外からの新技術の流入を考えるべきであろう。古墳時代前期後半は、石棺の製作が本格化される時期である。当地域において弥生時代から古墳時代にかけて集団墓として営まれ続けた箱式石棺も、当然その製作に影響を受けたと考えられる。そして、新たに流入したと考えられるチョウナ技法を用いた箱式石棺が、最も顕著に見られるのが千崎古墳群なのである。そこで、千崎古墳群を営んだ人々こそが、新技術を取り入れた石工集団を配下に置いた首長層であったのではないかと推測されるのである。千崎古墳群における箱式石棺は非常に特徴的であるといえる。その特徴を以下に整理すると、

①砂岩製である。
②長側石小口部分に溝状加工を施す。
③石材を継ぐ場合、カギ状タイプである。

となる。現在のところ、これらの特徴を全て併せ持つ箱式石棺は、千崎とその周辺に極めて限られる。よってこれを「千崎型箱式石棺」と呼ぶことを提唱しておきたい。

千崎型箱式石棺とその影響力　菊池川流域において製作された阿蘇溶結凝灰岩製の刳り抜き式石棺が、海路で畿内地域にまで運ばれたことが指摘されている（高木1983）。一方で、箱式石棺は全国

的に在地の石材を用いるのが普通であり、遠隔地に運ばれたという例は見当たらない。しかし、この千崎型箱式石棺は、例は少ないながらも、比較的遠くに強い影響を与えた可能性を有する。

その例は、県内の宇土市立岡の西潤野２号墳と、八代郡氷川今の室の山古墳２号石棺の２例である。いずれも千崎古墳群からは、直線距離にして約20km程度である。

西潤野２号墳は、円墳の主体部として千崎型箱式石棺が用いられている。砂岩製の長側石を各２枚ずつ、短側石を各１枚ずつの計６枚の石材を組み合わせた構造で、上面は面取りされる。蓋石は凝灰岩製で２枚の石材からなり、下面には棺身の幅に合わせた溝が精巧に彫られ、角は丸く仕上げられている。棺身石材である砂岩は周辺では産出しない。蓋石の凝灰岩は、付近に産出する所謂馬門石であると思われる。棺内には赤色顔料が見られ、特に人骨の頭部付近には朱が見られる。副葬品は全て石棺内からで、布に包まれた袋状鉄斧、竪櫛、素文鏡、その上に滑石製臼玉が連珠のまま載せられていた。時期は５世紀前半から中頃とされる。

室の山古墳２号石棺は円墳の中央からややずれた位置に築かれた千崎型箱式石棺である（図15－２）。砂岩製の長側石は３枚と２枚、短側石は２枚と１枚の計８枚を組み合わせた構造で、床には２枚の板石が敷かれる。同じく砂岩製の蓋石は２枚からなり、接合部はカギ状に加工されている。また、下面には棺身に合わせた溝が彫られる。副葬品には鉄斧、刀子、鉇、ひる鎌、錐、鉄剣がある。時期は５世紀前半頃とされる。

どちらも墳丘を持ち、副葬品も比較的豊富である。また、副葬品の内容が鏡や鉄器農工具のセットといった中央権力、畿内政権との繋がりを感じさせるものである点にも注意したい。

また、更に遠く離れた地にも千崎型箱式石棺に酷似した例は存在する。鹿児島県加世田市小湊の奥山古墳がそれである（橋本2006）。奥山古墳は自然の地形を利用し、丘陵の先端に区画溝を設けて作り出した円墳の主体部として、千崎型箱式石棺に酷似した箱式石棺が用いられている（図15－３）[7]。砂岩製の長側石各２枚、小口は各１枚の安山岩、小口の外側に更に各１枚の凝灰岩を組み合わせた構造で、床面には赤色土が敷かれる。長側石には溝状の加工を施し、長側石の継ぎ方はカギ状タイプである。また石材調査の結果、安山岩と凝灰岩は在地のものであると考えられるが、砂岩に関しては長島以北の天草産である可能性が高いとされている。また、周溝から祭祀土器が検出され、古墳時代前期後半の年代が与えられている。

このように千崎古墳群から離れた地点においても、その石材や構造、年代が一致する例があり、千崎型箱式石棺を作った石工集団が、これらの製作に関与した可能性は極めて高い。しかしその一方で、後期以降には千崎古墳群の周辺地域ですら、その存在を確認することはできなくなる。しかし、このことは千崎型箱式石棺のみに言えることではなく、県内全域において箱式石棺は減少する傾向があるといえる。千崎型箱式石棺は古墳時代前期後半に流入した新しい技術を得て成立し、一般に広く用いられることはなかったものの遠く鹿児島にまで伝播し、中期には中央権力との結びつきを持つに至るものの、後期にかけて箱式石棺が衰退する傾向を見せると、いち早くその姿を消したと考えられるのである。

（３）小結

以上、型式によって熊本県の箱式石棺を概観したが、宇土半島から上天草にかけての地域以外では、地域性を見出すことはできなかった。一見型式によって、地域的なまとまりが形成されたように見えても、そのまとまりに時期差が存在するなどして、そこに地域性を見ることはできないのである。つ

まり集団ごとに棺床構造・小口構造を統一する傾向を見せるものの、基本的に周辺の遺跡間ではこれが統一されず、地域性を形成するまでに至っていないといえる。これは、こうした箱式石棺墓を営んだそれぞれの集団を束ねる地位にあったものが棺床構造・小口構造の統制を図らず、各々の集団の意思によってその構造が決定されていたことを意味する。また、長側石の枚数や継ぎ方などの技術的な要素や、箱式石棺の規模を意味する内法といった他の要素にも明確な特徴が見出せないことも併せて考えると、箱式石棺全般の構築に制限・統制があったとは考えにくい。つまり熊本県域において箱式石棺は、中央権力からの影響が薄い、極めて在地の性格を持った、いわば自由な墓制であったと考えられるのである。

古墳時代において古墳は単なる大型の墓でなく、各首長の持てる権力を次代に引き継ぐ重要な祭祀の場であったと考えられている。しかし熊本県の箱式石棺において、墳丘を持つと考えられる例は全体の約１割強程度、中でも祭祀遺構の確認されるものは殆どなく、一般に副葬品にも乏しい。また、長側石１枚タイプのように高い技術によって作られた箱式石棺は、通常石棺群中でも単独で存在し、３基以上がまとまって見られるのは上天草市大矢野維和千崎の千崎古墳群のみである。このことは、箱式石棺に葬られた人々の持つ権力が安定して受け継がれる大きなものではなく、流動的な弱い権力であったことを示していると考えられる。このような状況の中で、数は少ないものの独自の型式の箱式石棺を持ち、権力と結んで遠く鹿児島にまで影響を持ったと考えられる千崎古墳群の存在は極めて特殊なものであったと考えられるのである。

4　結び

本論では熊本県内において、下位首長もしくは更に下位に位置する人々の墓とされる箱式石棺をその構造的特徴から型式分類し、それを分析することで古墳時代における県下の地域・社会の動向を論じた。同時に、現在研究としてあまり取り上げられない箱式石棺が熊本の墓制の中でどういう役割を果たしたのかを解明することを目的とした。

そこでまず分類の前段階に、清家章氏の論考にならいながら、使用石材、長側石構造、石棺の内法、棺床構造、小口構造の観点から属性の検討を行った。しかし、使用石材に明確な地域性は見られず、また畿内周辺で階層差を表すとされる長側石構造・石棺の内法からも、その差異を見出すことはできなかった。しかし、棺床構造・小口構造では、畿内周辺と同様に集団差を示す傾向が確認されたため、それによって型式設定を行った。結果、各型式は集団内ではかなり偏った傾向を示すものの、周辺遺跡との関連性は、宇土半島を除いてほとんどの地域で確認することができなかった。これは、熊本において箱式石棺は地域性を形成するに至らなかったことを意味している。畿内周辺では集団が集まることで地域性を形成していることを考えると、この違いは中央権力からの距離にあると考えられる。元々在地性が強く、下位首長もしくは更に下位に位置する人々の墓といわれる箱式石棺は、熊本では強い統制や制限を受けずに、小規模ながら、比較的自由に営まれたと考えられるのである。

しかし、ことを宇土半島地域に限定すれば、古墳時代前期後半に千崎古墳群を営んだ首長層が、新たな石材加工技術を有した石工集団をその配下において、「千崎型」といえるほどの特殊な形状の箱式石棺を築いた。その影響力は鹿児島にまで及ぶ比較的大きなものであり、古墳時代中期には、一般に広く用いられることはないものの、中央権力と結びつきを持つ人々にも小数用いられた。そして、時代が下り、箱式石棺が徐々に衰退するころには、いち早く姿を消すと考えられるのである。

今回本論を書くに当たって収集した資料は、数と項目こそ多かったものの、その多くを活用できたとは言いがたい。また、今回の分類は箱式石棺の形状を重視したものとなっているが、少なくとも熊本県内の古墳時代箱式石棺には典型例とも言うべきものが見られなかった。結果分析の章での論もその殆どが石材加工技術における変遷である。分類自体を、石材加工技術を主眼に据えたものにすることで違った箱式石棺の姿が見えてくることもありうる。また、箱式石棺の系譜を大陸に求めることができる以上、長崎・佐賀両県の箱式石棺との比較も必要不可欠である。今後の課題としたい。

なお、本稿は平成18年度熊本大学文学部に提出した卒業論文に加筆修正を施したものである。

注

1）清家章氏はこの長側石の枚数差を、その製作の難度や、多くが墳丘を持つ特定の個人墓として用いられたと考えられる点、副葬品の質・量、細かな石材加工や副室の有無の傾向から階層差を表すものであるとしている（清家2001）。

2）箱式石棺の長側石は、両辺で異なった枚数である場合が多々あるので、それらの場合は数の少ないほうをカウントした。また、枚数が報告に明記されないものや、図面からの正確な判断が困難なもの、箱式石棺が破壊されるなどして詳細が分からないものは、複数（不明）とした。

3）清家章氏は畿内周辺に見られる長側石の継ぎ方を、平継ぎ・重ね継ぎA・重ね継ぎBの3つに分けて検討したが、この要因は石材の特性によるものであり、地域的・集団的な規則性は見られないことを指摘している（清家2001）。

4）清家章氏は棺の幅を幅50cm未満の基準タイプと、幅50cm以上の幅広タイプの2つに分けて検討した。幅広タイプについて、階層的に上位にある長側石1枚タイプの多くが共通すること、墳丘を持つものが多いことから、棺の幅は階層差を示すとしている（清家2001）。

5）清家章氏はこの2つの棺床構造が、集団内で厳しく統制された分布を見せることから、墳丘単位での集団差を示すとしている（清家2001）。

6）若干定義は異なるが、清家章氏はこれらに厳密な集団性は認めにくいとしながらも、奈良県石光山古墳群において例の少ないⅡ字形タイプが4基中3基を占めると思われることなどを根拠に集団性を指摘し、同じく集団差を示す棺床構造の下位に位置づけている。また、Ⅱ字形タイプの出現が6世紀頃であること、同様の小口構造の木棺との関係についても触れている（清家2001）。

7）鹿児島大学総合研究博物館橋本達也先生にご教授いただいた。

引用・参考文献

岩崎充宏編　1990『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団

小野真一　1960「組合式箱形石棺の考察－駿河湾地方を中心として－」『考古学雑誌』第46巻第1号　日本考古学会：pp. 25－62

喜田貞吉　1915 a「所謂阿波式石棺に就いて笹井君に答ふ」『考古学雑誌』第5第9号　考古学会：pp. 13－30

喜田貞吉　1915 b「阿波の古墳墓に関する笹井君の再駁論に就いて」『考古学雑誌』第5巻第11号　考古学会：pp. 42－47

笹井新也　1913「阿波国古墳概説」『考古学雑誌』第4巻第4号　考古学会：pp. 1－15

笹井新也　1915 a「阿波式石棺を論じて喜田博士の所説を駁す」『考古学雑誌』第5巻第7号　考古学会：pp. 29－46

笹井新也　1915 b「再び阿波式石棺を論じて喜田博士の所説を駁す」『考古学雑誌』第5巻第10号　考古学会：pp. 11－62

清家　章　2001「畿内周辺における箱型石棺の型式と集団」『古代学研究』152　古代學研究會：pp. 1－18

髙木恭二　1983「石棺輸送論」『九州考古学』第58号　九州考古学会：pp. 42－54

田中　琢・佐原　真編　2002『日本考古学事典』三省堂

寺沢知子　1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第四　吉川弘文館：pp. 347－373
寺田正剛　2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第６号　西海考古同人会：pp. 133－154
橋本達也　2006「鹿児島のフィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－」『News　Letter』№13　鹿児島大学総合研究博物館
福永伸哉　1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第１号　考古学研究会：pp. 81－106
前田真由子編　2006「千崎古墳群第４次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』２　上天草市：pp. 1－26
和田清吾　1991「８　石工技術」『古墳時代の研究』５　生産と流通　雄山閣出版：pp. 127－156

図表参考文献

１．池田栄史　1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号　九州考古学会
２．池田栄史　1988「茂木根横穴群確認調査報告書（附　先尾串石棺群現状確認調査報告書）」『熊本県本渡市文化財調査報告書』第５集　熊本県本渡市教育委員会
３．岩崎充宏編　1990『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団
４．江本　直編　1980「車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第46集　熊本県教育委員会
５．江本　直　1994「２　遺跡・遺物調査資料」『西合志町史』資料編　西合志町史編纂協議会
６．緒方　勉　1970「熊本県嘉島村剣原箱式石棺－粘土枕・二体合葬の例－」『熊本史学』第35・36号　熊本史学会
７．乙益重隆　1956「八代市大鼠蔵山古墳－肥後における箱式石棺内合葬の例について－」『考古学雑誌』第41巻第４号　日本考古学会
８．乙益重隆　1962「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第３集　熊本県教育委員会
９．鹿本高等学校考古学部　1968『チブサン』第12号（鹿本高等学校考古学部報）
10．鹿本高等学校考古学部　1970「植木町粕道石棺実測調査」『チブサン』第17号（鹿本高等学校考古学部報）
11．鹿本高等学校考古学部　1972「山鹿市西牧石棺群」『チブサン』第25号（鹿本高等学校考古学部報）
12．鹿本高等学校考古学部　1973「方保田石棺調査」『チブサン』第27号（鹿本高等学校考古学部報）
13．鹿本高等学校考古学部　1973「山鹿市方保田石棺調査報告」『チブサン』No. 24（鹿本高等学校考古学部報）
14．隈　昭志・杉村彰一　1971「破壊された横道石棺群」『熊本史学』第38号　熊本史学会
15．桑原憲彰　1996「第二編　原始・古代」『菊鹿町史』本編　菊鹿町史編集委員会
16．熊本県教育委員会　1982「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」『熊本県文化財調査報告』第57集　熊本県教育委員会
17．熊本県教育委員会　1998『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会
18．熊本市教育委員会編　1969『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
19．熊本市教育委員会編　1999『熊本市埋蔵文化財調査年報』第２号　熊本市教育委員会
20．熊本市北部地区文化財調査報告書編集委員会　1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
21．熊本大学文学部考古学研究室編　1986『宇土半島古墳分布調査報告Ⅱ』三角町教育委員会
22．茨木親義編　1958「表層地質図」『熊本』経済企画庁総合開発局国土調査課・熊本県
23．高谷和生　1987「下山西遺跡」『熊本県文化財調査報告』第88集　熊本県教育委員会
24．坂本経堯　1972「古墳時代」『不知火町史』不知火町
25．坂本経堯　1984「平松箱式石棺郡」『三角町文化財調査報告』第３集　三角町教育委員会
26．坂本経堯・坂本経昌　1971『天草の古代』私家版
27．佐々木貞行・佐藤信二編　1976『室山古墳』宮原町教育委員会
28．島津義昭　1987「古墳時代」『松島町史』松島町
29．髙木恭二・元松茂樹・木下洋介編　1986「ヤンボシ塚古墳・楢先古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集　宇土市教育委員会

30. 髙木恭二・元松茂樹・木下洋介編　1992「立岡古墳群」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第19集　宇土市教育委員会
31. 髙木正文編　1975「久保遺跡」『熊本県文化財調査報告』第18集　熊本県文化財保護協会
32. 髙木正文　1984「熊本県装飾古墳総合調査報告書」『熊本県文化財調査報告』第68集　熊本県教育委員会
33. 髙木正文　1990「第２節　古墳時代」『益城町史』通史編　益城町史編纂委員会
34. 髙木正文　2006「第２編　考古」『菊水町史』資料編　菊水町史編纂委員会
35. 鶴嶋俊彦　1995「第一節　古墳時代」『須恵村誌』須恵村教育委員会
36. 鶴田倉造他編　2002「通史編　第一章　原始・古代　第二節　権力者の出現　二　日本列島統一の時代（古墳時代）」『五和町史』五和町史編纂委員会
37. 富樫卯三郎・髙木恭二・木下洋介　1987「古墳解説」『宇土半島基部古墳群』宇土市教育委員会
38. 富田紘一編　1985『源太ヶ塚古墳発掘調査報告書』熊本市教育委員会
39. 富田紘一編　1986「頂塚古墳発掘調査報告書」『鹿本町文化財調査研究報告』鹿本町教育委員会
40. 富田紘一　1988「第四節　古墳文化」『大津町史』大津町史編纂委員会
41. 富田紘一　1993「第１章　原始・古代の旭志村」『旭志村史』旭志村史編纂委員会
42. 富田紘一　2001「第一章　原始・古代の泗水町」『泗水町史』上巻　泗水町教育委員会
43. 中村幸史郎編　1989「銭亀塚古墳ほか」『山鹿市立博物館調査報告書』第９集
44. 野田拓治　1975「塚原」『熊本県文化財調査報告』第16集　熊本県教育委員会
45. 橋本達也　2006「鹿児島のフィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－」『News　Letter』№13　鹿児島大学総合研究博物館
46. 原口長之　1985「第四節　古墳文化」『山鹿市史』上巻　山鹿市史編纂室
47. 原口長之　1990「第四節　古墳文化」『鹿央町史』上巻　鹿央町史編纂室
48. 原口長之　1991「第２編　原始」『河内町史』通史編上　河内町
49. 平島広幸編　1979「亀原古墳」『荒尾市文化財調査報告』第４集　荒尾市教育委員会
50. 古城史雄・髙木恭二・木下洋介・杉井　健・藤本貴仁・中原幹彦　2002「古墳時代」『新宇土市史』資料編第２巻　考古資料・金石文・建築物・民俗　宇土市
51. 前田真由子編　2006「千崎古墳群第４次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』２　上天草市
52. 益永浩仁編　1999「松阪古墳」『菊水町文化財調査報告』菊水町教育委員会
53. 松本健朗　1994「資料編　考古」『玉東町史』西南戦争編・資料編　玉東町史編集委員会
54. 松本健朗・網田龍生・美濃口雅朗　1996「古墳時代」『新熊本市史』資料編第１巻　考古資料　熊本市
55. 松本雅明編　1965「第３節　古墳時代」『城南町史』城南町史編纂委員会
56. 松本雅明編　1967「下益城郡豊田村塚原丸尾の石棺」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会
57. 三角町史編纂協議会専門委員会編　1987「古墳時代」『三角町史』三角町
58. 村田　勉編　2004「広諏訪原遺跡」『鹿央町文化財調査報告書』鹿央町教育委員会
59. 森幸一郎編　2005「千崎古墳群第２次・第３次調査」『上天草市大矢野町編資料集』１　上天草市
60. 森下　功編　1973『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
61. 鹿本高校社会部　1965「御園石棺」『チブサン』第２号（鹿本高校社会部報）
62. 山下義勝編　1981「天草の古墳」『河浦町郷土史』河浦町教育委員会
63. 吉岡敏行　2004「第３章　通史－原始・古代－」『鹿本町史』上巻　鹿本町役場
64. 吉岡敏行　2004「第２編　第５章　文化財」『鹿本町史』下巻　鹿本町役場
65. 吉永　明編　1991「高島古墳群」『八代市文化財調査報告書』第５集　八代市教育委員会

挿図出典

図15－１は図表参考文献59、２は図表参考文献27、３は図表参考文献45より再トレース、一部改変

表4　熊本県箱式石棺地名表（1）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm)			床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石		副葬品・出土遺物	備　考	推定年代	文献
				長さ	幅	高さ					加工	石継ぎ				
1	金山古墳群	荒尾市内曲道出														17
2	四山箱式石棺群	荒尾市大島四山												移転		3
3	金山宮内	荒尾市金山宮内		198	46			安山岩						移転		17
4	金山古墳	荒尾市上金山														3
5	亀原古墳	荒尾市下井出山の上	○	156	32	26	粘土・砂	安山岩	2+3	H		重		赤色顔料　人骨	古墳時代前期後半～中期前半	49
6	高浜古墳	荒尾市高浜														3
7	野原古墳	荒尾市野原野原八幡境内		180	40	45	板石・砂	安山岩	3(3)+3(6)	H	×	平	鏡	赤色顔料　人骨	弥生末～古墳初頭	3
8	狐塚古墳	荒尾市平井											土師器			3
9	山上古墳	荒尾市山の神														3
10	中北古墳	玉名市伊倉北方五社														17
11	高田古墳	玉名市伊倉北方中北高田														3
12	岩崎石棺	玉名市岩崎池田														3
13	白骨どん古墳	玉名市北坂門田井戸	○													3
14	塚原古墳	玉名市岱明野口塚原														3
15	大原遺跡	玉名市岱明大原						安山岩					鉄鏃、勾玉、管玉、刀子	一部移転		3
	大原9号石棺			175	45		板石	安山岩	複	ロ	×	平	鉄鏃	枕石　東側石に線刻文を有する	古墳前期	32
16	岡石棺群	玉名市玉名岡						安山岩						二基は妙修寺内で保存		3
17	馬出古墳	玉名市玉名馬出						凝灰岩						移転		3
18	南大門石棺	玉名市築地南大門												一基は小型		3
19	繁根木石棺	玉名市繁根木											仿製方格規矩鏡			3
20	寺田3号古墳	玉名市寺田樋元														3
21	呑崎石棺	玉名市天水小天呑崎														3
22	塚の神西古墳	玉名市天水部田見穂丸														17
23	正法寺平古墳	玉名市天水尾田正法寺平												破損		17
24	米ノ山石棺	玉名市天水立花米ノ山														17
25	大塚古墳	玉名市天水立花　中田														17
26	猿楽古墳	玉名市猿楽														3
27	大の島古墳	玉名市中大の島	○													3
28	京塚石棺	玉名市中坂門田京塚														3
29	西の山石棺	玉名市西の山														3
30	赤秀古墳	玉名市滑上赤秀											鉄剣			3
31	田代阿弥蛇塚古墳	玉名市滑上田代														3
32	田代中の塚古墳	玉名市滑上田代														3
33	城ヶ辻1号古墳	玉名市向津留城城ヶ辻											鏡			3
34	高岡いっちょう畑古墳	玉名市山田高岡														3
35	高野古閑石棺	玉名郡菊水高野古閑	○													3
36	箱井古墳	玉名郡玉東白木箱井	○													3
37	上古閑古墳	玉名郡玉東白木上古閑														17
38	御囲石棺	玉名郡玉東椿井東屋敷														3
39	天神山古墳	玉名郡玉東町木葉町下	○	171	51	36	板石	凝灰岩	2+2	ロ		平		赤色顔料　北側床石から棺外に抜ける排水溝を持つ	古墳中期後半	53
40	松坂古墳	玉名郡和水瀬川浦	○	140	30	25	板石・粘土	安山岩	3+3	H		重	管玉、小玉	赤色顔料　人骨2体　床面に粘土を踏み固めた足跡あり	古墳前期	52
41	江田土噴1号石棺	玉名郡和水江田上土噴		163	40	40	凝灰岩破片	凝灰岩(粘板岩)	1+3	ロ		平	鏡、鉄鏃	赤色顔料　蓋石材4枚中1枚のみ粘板岩であり、裏面に刳り込みを有する　床面の凝灰岩破片は棺材調整屑と考えられる		3
	江田土噴2号石棺			170	40	40			3+3							34
	江田土噴3号石棺															34
	江田土噴4号石棺															34
	江田土噴5号石棺															34
42	江田穴観音石棺	玉名郡和水江田中小路														3

表5　熊本県箱式石棺地名表（2）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石 枚数	小口 構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
43	窟門寺原一号石棺	玉名郡和水窟門	○	140	40	35		凝灰岩		ロ		平				3
44	天御子石棺	玉名郡和水窟門天御子		192	48	44		凝灰岩	4+4	H		平		赤色顔料		3
45	前原一号石棺	玉名郡和水窟門天御子		177	47	50	礫粘土・砂	凝灰岩	2+2	H		平		棺内赤色顔料　棺蓋全面赤色顔料　蓋石上面をカマボコ状に丸く加工する		34
	前原二号石棺			175	45	22	砂	凝灰岩	2+3	H		平		赤色顔料　人骨1体		34
	前原三号石棺			186	45	30	細砂・荒砂	凝灰岩	2+3	H		平	鉄剣　刀子	赤色顔料　人骨2体		34
46	北赤徳原石棺	玉名郡和水下津原北赤徳原			44		地山		2+2(+割石)	H		平	鉄剣　刀子	人骨一体　蓋石上面に面取り加工		34
47	下津原上西原箱式石棺	玉名郡和水下津原上西原		220	70	75	砂利	凝灰岩	2+2	ロ		重		床面西端に石枕と思われる板石2枚（周辺に赤色顔料）		17
48	西葉山塚石棺群	玉名郡和水下津原上西原														3
49	上原石棺	玉名郡和水下津原上原		182	36	46	小礫	凝灰岩	2+板	II		平		人骨片		3
50	下弥当石棺	玉名郡和水斉藤														3
51	大塚石棺群	玉名郡和水来山											内行花文鏡			3
52	西福寺古墳群	山鹿市城西福寺														17
53	久井原傾城塔1号石棺	玉名郡和水久井原傾城塔		175	65	38	小砂利	凝灰岩	2					赤色顔料		34
	久井原傾城塔2号石棺			167	82	53	赤色顔料	安山岩	2+2(+切石)				土師器　鉄器			34
54	坂東石棺	山鹿市鹿本											鉄器、高坏			3
55	頂塚墓地箱式石棺	山鹿市鹿本茶臼							板	H		重		人骨2体		17
56	小町塚東側石棺	山鹿市鹿本高橋内原						安山岩						赤色顔料		3
57	五社宮下石棺	山鹿市鹿本津袋本村														3
58	頂塚古墳	山鹿市鹿本津袋茶臼	○	155	35	25			板	H		重	鉄鏃	人骨2体	古墳中期前半	39
59	鬼塚古墳	山鹿市鹿央岩原背若	○										珠文鏡、刀子、鏃先			17
60	塚さん古墳	山鹿市鹿央春間桜の上														3
61	久保原石棺	山鹿市鹿央岩原久保原					板石・粘土	凝灰岩	1+1	H	×		珠文鏡、鈴、刀子、鏃先、直刀	赤色顔料付着　人骨一部	古墳中期後半～後期前半	58
62	郷原1号石棺	山鹿市鹿央岩原郷原		190	40		粘土（赤色顔料）	変成岩						人骨2体　赤色顔料		58
	郷原3号石棺			170	35		粘土（赤色顔料）	凝灰岩						人骨2体		58
63	寺の上石棺	山鹿市鹿央広寺の上														3
64	原部石棺	山鹿市鹿央原部														3
65	浦大門遺跡	山鹿市鹿央千田浦大門						凝灰岩					竹筒、土師器	方形周溝		3
66	御園古墳	山鹿市椿井		178	40	49		凝灰岩	2+2					周囲に10数基の石棺		61
67	今山4号石棺	山鹿市菊鹿下永野今山	○	163	37	29								人骨片		3
68	長谷古墳群	山鹿市菊鹿長谷														3
69	椿井古墳	山鹿市椿井東屋敷											小刀			3
70	藤井石棺	山鹿市藤井西原														3
71	西牧石棺群1号石棺	山鹿市西牧上の山		165	101	30		凝灰岩	2(1)+2(1)	ロ	×	平	短剣	西牧石棺群	古墳中期後半～後期前半	11
	西牧石棺群2号石棺													西牧石棺群		11
72	鍋田東石棺	山鹿市鍋田											鉄剣	移転		3
73	八の峰古墳	山鹿市八の峰														3
74	白石石棺群	山鹿市白石											仿製内行花文鏡、土師器片		弥生末～古墳初頭	3
75	方保田石棺	山鹿市方保田		90	50		小礫					重		人骨　赤色顔料		12
76	塚の本石棺	山鹿市方保田														3
77	城山石棺	山鹿市保多田城山	○										直刀			3
78	一本杉1号石棺	山鹿市方保田日置		113	46	35	地山	凝灰岩	3+3	ロ	×	平		赤色顔料	古墳後期	13
	一本杉2号石棺							凝灰岩								13
79	馬見塚辻古墳4号墳	山鹿市方保田辻	○	187	42	36	砂・粘土	凝灰岩	3+3	H		重	鉄剣、蕨手刀子	人骨1体　粘土枕	古墳中期後半	3
80	小原大塚古墳	山鹿市小原大塚	○													3
81	中尾2号石棺	山鹿市小原中尾		199	88	35		凝灰岩					刀子			3
	中尾5号石棺			158	66	50		凝灰岩					銅鏡	粘土枕と思われる盛り上がりが認められる		46

表6　熊本県箱式石棺地名表（3）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法（内法）(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
82	竜宮石棺	山鹿市小原竜宮		164		25	赤土	凝灰岩						赤色顔料		3
83	舞野石棺群1号石棺	山鹿市平山舞野		151	31	32	礫	凝灰岩	2	H	○	平	ガラス小玉	粘土枕　棺外より土師器片		43
	舞野石棺群2号石棺			169	38	30	粘土（赤色顔料）	凝灰岩	2+3 (1)	ロ	×	平	重圏素文鏡、刀子	人骨2体　粘土枕　赤色顔料　棺外より土師器片	古墳前期後半	43
	舞野石棺群3号石棺			200	45	35		凝灰岩	複			平		赤色顔料		43
84	小野箱式石棺	鹿本郡植木小野														17
85	岩野箱式石棺	鹿本郡植木岩野														17
86	山の上石棺	鹿本郡植木宮原山の上		180	38	31	礫	安山岩	3 (1) +4	H		重		粘土枕　人骨　赤色顔料	古墳後期	9
87	正済橋石棺	鹿本郡植木宮原正済橋											鉄剣（鉇？）			3
88	八久保石棺	鹿本郡植木宮原八久保														3
89	広譲訪原石棺	鹿本郡植木轡掛譲訪原					赤色顔料	凝灰岩					刀子、鉄鏃	墓壙内に現地調整の痕跡と思われる石片		58
90	舘道石棺群1号石棺	鹿本郡植木舘道		190	60		粘土	軽石	複	H		平		舘道石棺群　赤色顔料		10
	舘道石棺群2号石棺			200	50			軽石						舘道石棺群　赤色顔料		10
	舘道石棺群4号石棺			200	60			軽石	複	H		平		舘道石棺群　赤色顔料		10
91	馬糞塚古墳群	菊池郡大津矢護川御願所														17
92	大林古墳群	菊池郡大津大林	○	188	78	85	板石	安山岩					直刀	御石上面及び棺外に板石を積み上げている副室を持つ？		40
93	一丁畑古墳	菊池郡菊陽馬場楠一丁畑														17
94	追原箱式石棺	菊池郡西合志追原		177	56	48	粘土	安山岩					直刀　刀子　鉄鏃　鉄鏃先　鉄斧　鉄鉾　鉇　鉄針　鎧　勾玉　ガラス製丸小玉　臼玉	石材の継ぎ目に粘土を詰める		5
95	山崎古墳	菊池市七城山崎														3
96	水次遺跡	菊池市七城水次														3
97	蛇塚古墳	菊池市七城蛇塚	○											前方部に石棺		3
98	富出分古墳	菊池市泗水吉富富出分														3
99	村吉古墳	菊池市泗水吉富村吉														3
100	陣塚古墳	菊池市泗水田島陣塚						安山岩	2+2	H		重	直刀			42
101	北原古墳	菊池市泗水南田島北原														3
102	南原古墳	菊池市泗水南原												周辺から野辺田式土器、土師器		3
103	平山古墳	菊池市旭志高柳														3
104	北受遺跡	菊池市旭志麓高柳北受														3
105	五十町遺跡	菊池市旭志麓高柳五十町												周辺から野辺田式土器		3
106	横道石棺群1号石棺	菊池市旭志麓横道		95	37	30	赤色顔料	安山岩	2+2	ロ	×	平		横道石棺群	古墳中期	14
	横道石棺群2号石棺			176	52	27	小礫（赤色顔料）	安山岩	複	ロ	×	平	鉄剣、鉄鏃、刀子、鉇、ガラス小玉、滑石製小玉、滑石製勾玉、碧玉製管玉	横道石棺群	古墳中期	14
	横道石棺群3号石棺						小礫（赤色顔料）	安山岩		Ⅱ			鉄片	横道石棺群	古墳中期	14
107	南桜ヶ水遺跡	菊池市旭志南桜ヶ水											勾玉			3
108	上原石棺	合志市上原														3
109	永田石棺	合志市永田														3
110	若原石棺	合志市合生若原														3
111	生坪古墳	合志市合生生坪	○													3
112	追原ハヤマ塚古墳	合志市合生追原											仿製内行花文鏡			3
113	追原長塚古墳	合志市合生追原	○													3
114	上生上ノ原楠木畑古墳	合志市上生上ノ原						石灰岩								5
115	上生上ノ原遺跡	合志市上生上ノ原											短甲　三角板鋲留製品			5
116	宮山石棺	阿蘇市的石納山														3
117	本村石棺	阿蘇市小野田村下		170	75		板石	安山岩	複	H	×	重	土師器	棺外より完形土師器2個	古墳中期前半	4
118	村下石棺郡	阿蘇市小野田村下						安山岩						棺外より土師器		3
119	下山西遺跡1号石棺	阿蘇市乙姫下山西		80	30			安山岩					ガラス玉	赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23
	下山西遺跡2号石棺			181	50	36	板石・粘土（赤色顔料）	安山岩	3 (1)	H	×	重	短剣	人骨　赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23

表7　熊本県箱式石棺地名表（4）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm)			床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石		副葬品・出土遺物	備　考	推定年代	文献
				長さ	幅	高さ					加工	石継ぎ				
119	下山西遺跡3号石棺	阿蘇市乙姫下山西		176	55	30	板石（赤色顔料）	安山岩	3+3(1)	H	×	重	鉄剣	人骨　棺内に粘土を塗った上に赤色顔料を塗布　周辺より重弧文を持つ長頸壺出土	弥生末～古墳初頭	23
	下山西遺跡4号石棺			188	50	30	板石	安山岩	3(1)+3(1)	東：H 西：ロ	×	重	鉄剣	赤色顔料	弥生末～古墳初頭	23
120	古閑石棺	阿蘇市狩尾古閑														3
121	二本松石棺	阿蘇市西湯浦二本松														3
122	源太ヶ塚箱式石棺	阿蘇市南宮原村上		150	35	40	粘土	安山岩	複	ロ	×	平			古墳後期後半	38
123	山田1号古墳	阿蘇市山田今古閑							複				土師器			3
124	平原1号墳	阿蘇市山田平原	○					安山岩					剣、堅櫛			3
125	丸山石棺	阿蘇郡一の宮手野	○	333	63	48	板石	安山岩	1+2	H	○	平		赤色顔料　蓋石に溝あり		8
126	秋葉権現塚石棺	阿蘇郡一の宮手野	○	300	50			安山岩			×			赤色顔料		3
127	和田家墓地内石棺	阿蘇郡一の宮手野	○		40		礫	安山岩								8
128	観音堂前石棺	阿蘇郡一の宮手野						安山岩								3
129	鞍掛塚石棺	阿蘇郡一の宮中通勝負塚											変形文鏡、珠文鏡、四獣鏡			3
130	番出古墳群1号石棺	阿蘇郡一の宮中坂梨番出	○	180	50	40	板石	安山岩	2+2(1)	H		重	仿製内行花文鏡、直刀、鉄剣、堅櫛	人骨に赤色顔料付着	古墳中期	4
131	梅木古墳	阿蘇郡小国宮原梅木														3
132	上色見石棺	阿蘇郡上色見														3
133	六の子石1号墳	阿蘇郡久木野村久石六の子石														3
134	上岡古墳群	阿蘇郡高森高森上の岡						安山岩					馬具、須恵器、直刀、鉄鏃、刀子			3
135	中大村古墳1号墳	阿蘇郡高森色見中村						安山岩					堅櫛、剣	方形周溝		3
136	キツネ塚石棺群	阿蘇郡西原小森											直刀、鉄鏃			3
137	仲鶴石棺	阿蘇郡西原小森														3
138	あかとう石棺	阿蘇郡西原小森														3
139	にれやま石棺	阿蘇郡西原宮山														3
140	宮山神社石棺	阿蘇郡西原宮山														3
141	秋田石棺	阿蘇郡西原宮山											鉄刀			3
142	将軍塚古墳	阿蘇郡西原浦宮山	○													3
143	小松山2号石棺	熊本市池上		168	48											3
144	高城山3号墳箱式石棺	熊本市小島高城山	○	200	45			安山岩						人骨一体　消滅		54
145	楢崎山古墳4号墳	熊本市小島下町権現平	○										須恵器片	楢崎山古墳群　赤色顔料		18
	楢崎山古墳1号石棺			165	51	52			1+1	H	×		鉄剣、直刀、刀子	楢崎山古墳群　赤色顔料		18
	楢崎山古墳2号石棺													楢崎山古墳群		18
	楢崎山古墳3号石棺													楢崎山古墳群		18
146	中山石棺	熊本市小山中山		170	40	40		安山岩	2+3	H		重		人骨4体		60
147	堂手石棺群1号石棺	熊本市釜尾字福寺		360	80			安山岩	2+2	H	×	重		堂手石棺群		54
	堂手石棺群2号石棺			335	80			安山岩	4+4	H	×	重		堂手石棺群		54
148	二本松古墳群	熊本市上高橋						安山岩								51
149	近津園山箱式石棺	熊本市上松尾湯ノ谷														17
150	長崎鼻遺跡群	熊本市河内船津長崎鼻														3
151	夢の上石棺	熊本市河内船津笹原						安山岩						赤色顔料　人骨片	古墳前期後半～中期前半	3
152	上荒尾箱式石棺群	熊本市島崎														17
153	高平箱式石棺	熊本市清水町高平打出屋敷	○													51
154	竹ノ上石棺	熊本市清水津浦字竹ノ上											珠文鏡、鉄剣			54
155	高橋稲荷石棺群	熊本市城山上代無田鶴											滑石製勾玉、内行花文鏡			54
156	陣内石棺	熊本市水源											方格規矩鏡	人骨2体　赤色顔料		54
157	広木遺跡	熊本市水源		160	30	30	粘土（赤色顔料）	安山岩	2+2	H	×	重		方形周溝　人骨一体　粘土枕　周溝より土師器	古墳中期前半	60
158	水源地遺跡2号円形周溝墓	熊本市水源		115	25	21			2+2	H		重		円形周溝を持つ　墓壙四隅に杭状の柱を立てた形跡あり　周辺からフレイクや石粉などの石棺現地調整の痕跡を検出（棺身と接合する礫片あり）	古墳中期	19

表8　熊本県箱式石棺地名表（5）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石 枚数	小口 構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備　考	推定年代	文献
158	水源地遺跡3号方形周溝墓	熊本市水源		125	27	27			2+2	H		重		方形周溝を持つ　周辺からフレイクや石粉などの石棺現地調整の痕跡を検出　赤色顔料	古墳中期	19
	水源地遺跡5号円形周溝墓													円形周溝を持つ　陸橋部に焼火の痕跡　石棺を破砕したと思われる礫多量に検出（赤色顔料）		19
	水源地遺跡7号円形周溝墓												素文鏡	円形周溝を持つ　周辺から石棺現地調整の痕跡を検出（小口と接合する資料あり）		19
	水源C地点3号方形周溝墓												刀子	人骨（布が覆う）		3
	水源D地点石棺													円形周溝		3
159	城山古墳群	熊本市高橋町														54
160	中牧鶏石棺	熊本市竜田町中牧鶏		130	75	55		凝灰岩	複	ロ	×			棺外より須恵器出土	古墳中期	51
161	若殿塚遺跡	熊本市竜田弓削														51
162	花崗山石棺群7号石棺	熊本市花崗山		201	44	40	板石	安山岩	2+2	H		重	土師器、碧玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス玉	花崗山石棺群　人骨2体　赤色顔料		18
163	本妙寺A箱式石棺	熊本市花園		172	38			安山岩	複				刀子	頭骨2個　赤色顔料		19
164	袖の木石棺	熊本市北部祝川袖の木											須恵器			3
165	八幡名石棺	熊本市北部和泉川東八幡名											銅戈（中広）			3
166	釜尾堂出石棺	熊本市北部釜尾堂出														3
167	小林2号石棺	熊本市松尾梅洞		170	55	45	砂利・粘土（赤色顔料）	安山岩	2+3	H	×	重	鉄剣	小林石棺群　小口石の下に固定のための石片をおく		54
	小林3号石棺						砂利・粘土（赤色顔料）	安山岩	複	H	×	平	鉄剣、刀子	小林石棺群		54
	小林4号石棺													小林石棺群、破壊		54
168	西竹洞石棺	熊本市松尾上松尾西竹洞		210	60				1+2				直刀？	人骨2体　赤色顔料		18
169	松尾烏石棺群	熊本市松尾上松尾														51
170	松崎八幡石棺	熊本市清水松崎		188	53	50		安山岩	1+1					赤色顔料		20
171	宮の本遺跡	上益城郡嘉島下六嘉宮の本														51
172	塔ノ木遺跡	上益城郡嘉島塔ノ木豆坂														51
173	上官塚遺跡	上益城郡嘉島井寺上官塚														51
174	剣原遺跡	上益城郡嘉島北甘木剣原		188	39	28	粘土・小礫	安山岩	3+3	H	×		鉄剣、刀子、鎌	人骨2体　赤色顔料	古墳中期	6
175	豊秋石棺群	上益城郡御船豊秋											捩文鏡			51
176	久保遺跡1号石棺	上益城郡御船秋只久保		228	54	50	板石・円礫（赤色顔料）	安山岩	2(2)+2(2)	H		平	剣、刀子、勾玉、白玉、管玉、貝釧	人骨1体　赤色顔料　棺外に玉砂利	古墳中期前半	31
	久保遺跡2号石棺			176	42	34	円礫	安山岩	3+3(1)	H		重		人骨2体　赤色顔料	古墳中期前半	31
	久保遺跡3号石棺			190	40	42	円礫（赤色顔料）	安山岩	3	H		重		人骨2体	古墳中期前半	31
	久保遺跡4号石棺							安山岩		H			滑石製勾玉	人骨2体赤色顔料	古墳中期前半	31
	久保遺跡5号石棺			184	47	50	円礫	安山岩	2+2	H		重		赤色顔料	古墳中期前半	31
	久保遺跡6号石棺															31
	久保遺跡7号石棺							安山岩	複					人骨2体　赤色顔料	古墳中期前半	31
	久保遺跡8号石棺			178	46	48	円礫	安山岩	2(1)+2(1)	H		重		人骨1体　赤色顔料	古墳中期前半	31
	久保遺跡9号石棺			168	50	36	円礫	安山岩	2+2	H		重		人骨1体　赤色顔料	古墳中期前半	31
177	楽石棺群	上益城郡山都														3
178	上陰古墳	上益城郡益城上陰														51
179	飯田溝石棺	上益城郡益城北甘木飯田溝														51
180	秋永遺跡	上益城郡益城小池秋永						安山岩					刀子、剣、鉄鏃片	方形周溝　周溝より土師器、鉄鏃		3
181	高木箱式石棺群	上益城郡益城惣領高木						安山岩						赤色顔料		17
182	城ノ本古墳	上益城郡益城寺迫城ノ本	○	157	36	28	砂利 粘土	安山岩					内行花文鏡　勾玉　管玉　布片	赤色顔料　粘土枕　人骨2体	古墳前期後半～中期前半	17
183	石井川石棺	上益城郡益城古閑石井川						安山岩						赤色顔料		33
184	高木石棺群	上益城郡益城惣領高木						安山岩						赤色顔料		33

表9　熊本県箱式石棺地名表（6）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石 枚数	小口 構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備　考	推定年代	文献
185	火迫石棺群	上益城郡益城安永火迫						安山岩						赤色顔料		33
186	上田平古墳	上益城郡益城寺迫上田平						安山岩						赤色顔料		33
187	遠見塚	上益城郡益城寺迫遠見塚														17
188	上ノ原箱式石棺群	上益城郡益城福原上ノ原		160	60	30		安山岩						赤色顔料		17
189	五千塚箱式石棺	上益城郡益城福原五千塚						安山岩								17
190	秋貝古墳群	上益城郡御船小坂久保ほか														51
191	木倉西原石棺	上益城郡御船木倉西原												人骨8体		51
192	城塚石棺	上益城郡御船豊秋東原											刀子			51
193	寺の上古墳	下益城郡城南坂野迫吉野		120	55	55			2	H		重	土師器片	周辺から須恵器		55
194	山畑古墳	下益城郡城南坂野山畑														3
195	迫甲古墳	下益城郡城南坂野迫														51
196	迫乙古墳	下益城郡城南坂野迫														51
197	東天神原乙遺跡	下益城郡城南坂野東天神原	○													51
198	東天神原内遺跡	下益城郡城南坂野東天神原											土製管玉、土錘			51
199	大塚山西古墳	下益城郡城南坂野東天神原	○										須恵器、直刀、刀子、鉄鏃			51
200	構口石棺	下益城郡城南宮地構口														51
201	城ノ鼻古墳	下益城郡城南隈庄古城														51
202	上の山石棺	下益城郡城南隈庄上の山											土師器片			51
203	岸甲古墳	下益城郡城南東阿高岸	○										剣、貝釧			51
204	岸乙古墳	下益城郡城南東阿高岸														51
205	影熊石棺	下益城郡城南阿高影熊	○													51
206	丸山3号墳	下益城郡城南塚原丸山	○										碧玉製管玉、ガラス玉、金環、鉄鏃、刀子	円形周溝		44
	丸山8号墳		○	260	155	50		凝灰岩		H				円形周溝　横口式石棺？		44
	丸山9号石棺		○	220	110			凝灰岩					刀子、鉄鏃	円形周溝		44
	丸山12号墳		○	165	70			凝灰岩						円形周溝内より土師器		44
	丸山13号墳		○	180	100			凝灰岩	1	H		半		円形周溝より土師器、須恵器		44
	丸山14号墳		○	190	100			凝灰岩						円形周溝		44
	丸山16号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山17号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山18号墳		○											円形周溝		44
	丸山19号墳		○											円形周溝		44
	丸山21号墳		○											円形周溝		44
	丸山24号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山28号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山29号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山31号墳		○					凝灰岩						円形周溝		44
	丸山34号墳		○	192	96	51		凝灰岩		H				墓壙内に黒色土を詰め、上に凝灰岩平石を置く　赤色顔料　横口式石棺？　周溝より土師器、須恵器が出土		44
207	丸尾1号墳	下益城郡城南塚原丸尾	○	165	50	48	円礫	安山岩	2+2(1)	H		重		人骨2体（頭蓋骨に赤色顔料）　消滅		56
	丸尾2号墳							凝灰岩						消滅		55
	丸尾3号墳													消滅		55
	丸尾4号墳			175	50	53	粘土（炭化物）	凝灰岩	2+2	H		重		人骨2体　赤色顔料		55
	丸尾5号墳		○	187	35	39	礫（赤色顔料）	安山岩	3+3 (1)	H		重	鉄剣、堅櫛	人骨2体　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	44
208	塚原古墳1号石棺	下益城郡城南塚原北原						凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳2号石棺							凝灰岩					ガラス小玉	塚原古墳群		44
	塚原古墳3号石棺							凝灰岩					勾玉、ガラス玉	塚原古墳群		44
	塚原古墳4号石棺							凝灰岩	複					塚原古墳群		44
	塚原古墳5号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44

表10　熊本県箱式石棺地名表（7）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石積み	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
208	塚原古墳6号石棺	下益城郡城南塚原北原						凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳7号石棺			176	45	43		凝灰岩	3+3	H		平	鉄鉾	塚原古墳群		44
	塚原古墳8号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳9号石棺							凝灰岩		H				塚原古墳群		44
	塚原古墳10号石棺			172	46	40	赤色顔料	凝灰岩	2+2	H		平	鉄刀、鉄鏃	塚原古墳群		44
	塚原古墳11号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳12号石棺			126	68	72		凝灰岩	1+1	H				塚原古墳群		44
	塚原古墳13号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳14号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳15号石棺			150	44	47		安山岩	2+3	H		重	鉄剣	塚原古墳群		44
	塚原古墳16号石棺							凝灰岩						塚原古墳群		44
	塚原古墳17号石棺			190	94			凝灰岩	1	H				塚原古墳群		44
	塚原30号方形周溝墓				93			凝灰岩		H		平		塚原古墳群　方形周溝		44
	塚原31号方形周溝墓							凝灰岩						塚原古墳群　方形周溝		44
	塚原35号方形周溝墓			225	120	18		凝灰岩		H				塚原古墳群　赤色顔料　方形周溝　周溝から土師器		44
	塚原36号方形周溝墓			183	111	52		凝灰岩						塚原古墳群　方形周溝　周溝から土師器 横口式石棺？		44
	塚原39号方形周溝墓							凝灰岩						塚原古墳群　方形周溝		44
209	北原甲古墳	下益城郡城南塚原北原	○													51
210	北原乙古墳	下益城郡城南塚原北原														51
211	木原石棺	下益城郡富合木原														51
212	久保2号墳	宇土市伊無田北受	○	188	46			安山岩								50
213	城ノ越古墳	宇土市栗崎城ノ越	○											板石の一部残存　赤色顔料		51
214	古保里1号石棺	宇土市古保里南五器田						安山岩	複		×		鹿角製刀子　箭	古保里箱式石棺群　人骨出土　蓋石四枚		50
	古保里2号石棺			161	37	48	粘土	砂岩切石	複		×		短剣、箭、硬玉製勾玉、珠文鏡	古保里箱式石棺群		50
	古保里3号石棺			176	47	38	粘土	安山岩割石	2+3	H	×	重	鉄剣、鉄鏃、箭	古保里箱式石棺群　人骨3体　両端に粘土枕	古墳中期前半	50
215	境目1号石棺	宇土市境目西原		163	41		粘土（赤色顔料）		3+3	H	×	重	鉄鏃	境目石棺群　人骨1体	古墳中期前半	50
	境目2号石棺			175	34		粘土（赤色顔料）		複	H	×	重		境目石棺群　人骨2体	古墳中期前半	50
	境目3号石棺			168	43		板石・粘土（赤色顔料）		複		×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
	境目4号石棺			155	29		粘土		複	H	×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
	境目5号石棺						粘土（赤色顔料）						小玉	境目石棺群　枕石	古墳中期前半	50
	境目6号石棺			177	58		粘土（赤色顔料）		複	ロ	×	重	小玉片	境目石棺群　人骨3体　枕石（朱）	古墳中期前半	50
	境目8号石棺			158	34		板石（赤色顔料）		複	H	×	重		境目石棺群	古墳中期前半	50
216	平原石棺	宇土市境目平原														51
217	御殿山箱式石棺	宇土市笠岩堤の上														51
218	梅崎箱式石棺群	宇土市笹原梅崎						安山岩								50
219	西岡台遺跡	宇土市神馬千畳敷		185	37	30		安山岩	3+3	北西：ロ 南東：Ⅱ	×	重			古墳前期	50
220	小部田石棺	宇土市住吉堤上		144	43			凝灰岩（馬門石）								50
221	西潤野古墳2号石棺	宇土市立岡西潤野		90	41	43	円礫（赤色顔料）	凝灰岩	2	H		平			古墳中期	30
222	西潤野2号墳	宇土市立岡西潤野	○	167	50	50	板石・円礫	砂岩	2+2	H	○	カギ状	袋状鉄斧、素文鏡、滑石製臼玉、竹管	人骨1体　凝灰岩製蓋石2枚（滑状加工あり）　石棺内赤色顔料　人骨顔面付近朱　御石に割付線を見られる工具痕	古墳中期	30

表11　熊本県箱式石棺地名表（8）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
223	長浜1号石棺	宇土市長浜牧の道		172	40	20	赤土		4+4(1)	H	×	有	須恵器片	長浜箱式石棺群　赤色顔料	古墳中期前半	50
	長浜2号石棺			170	34	23	赤土		4+4	東：H 西：ロ	×	有	須恵器片、鉄鏃片	長浜箱式石棺群	古墳中期前半	50
224	楢崎古墳5号石棺	宇土市花園楢崎	○	173	59	55		凝灰岩	2+2	H	○	平		側石の継ぎ目は平坦に加工し、小口石材も面取りが施される	古墳中期後半～後期前半	29
225	上松山遺跡4号方形周溝墓	宇土市松山居屋敷						安山岩						赤色顔料塗布		50
226	南山内1号石棺	宇土市松山南山内		190	23	30	板石・粘土	安山岩	複	ロ	×	有		南山内箱式石棺群　枕石（赤色顔料）	古墳中期	50
	南山内2号石棺			192	42	30	板石・粘土	安山岩	複	北：H 南：Ⅱ	×	有	刀子	南山内箱式石棺群　人骨一体　赤色顔料	古墳中期	50
	南山内3号石棺			195	53	35		安山岩	複	H	×	有	刀子	南山内箱式石棺群　赤色顔料	古墳中期	50
227	マブシ1号石棺	宇土市下網田塩屋		188	68		礫 (赤色顔料)		複		○			マブシ古墳群人骨片		37
	マブシ2号石棺			193	78	84	板石・円礫 (赤色顔料)	砂岩	2+2	H	○	平	鉄鏃	マブシ古墳群　蓋石二枚（溝状加工）石材に面取りが施される　棺外より刀子	古墳中期	37
	マブシ4号石棺													マブシ古墳群　消滅		37
	マブシ6号石棺						円礫							マブシ古墳群		50
228	大見観音崎古墳1号石棺	宇城市不知火大見観音崎		183	73	100	粘土	凝灰岩	1+1	H	○			大見観音崎石棺群　赤色顔料　蓋に把手	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳2号石棺						粘土	砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳3号石棺						粘土	安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳4号石棺			180	41	21	板石・円礫	砂岩	複	H		有	刀子	大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳5号石棺			100	80	35	礫	安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳6号石棺			235	50	30	礫	砂岩		H				大見観音崎石棺群　赤色顔料	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳7号石棺							砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳8号石棺							安山岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳10号石棺							砂岩						大見観音崎石棺群	古墳中期後半～後期前半	16
	大見観音崎古墳11号石棺			195	46		礫 (赤色顔料)	頁岩 安山岩	複					大見観音崎石棺群　赤色顔料　周辺より舟先検出	古墳中期後半～後期前半	16
229	御領石棺	宇城市不知火御領御手洗														51
230	二本松石棺	宇城市不知火御領二本松														51
231	十五社石棺	宇城市不知火十五社														51
232	キツネ塚古墳	宇城市不知火永尾西於呂口														3
233	於呂口東箱式石棺	宇城市不知火永尾東						砂岩								24
234	於呂口西箱式石棺	宇城市不知火永尾						砂岩								24
235	八久保古墳	宇城市不知火長崎八久保	○					砂岩					直刀			24
236	弁天山箱式石棺	宇城市不知火長崎弁天山														24
237	東塩屋浦古墳	宇城市不知火東塩屋浦	○		45		二段床 (赤色顔料)	砂岩		H	○		直刀	人骨　二段床は追葬時？蓋石溝状加工(丹)		24
238	下郷・北原石棺	宇城市豊野下郷北原														51
239	豊原箱式石棺墓	宇城市豊野南崎豊原											土師器完形品			51
240	久具古墳	宇城市松橋久具														51
241	要1号石棺	宇城市三角大口		80	45			砂岩	1+2	H	×			要古墳群	古墳中期後半～後期前半	21
	要2号石棺							安山岩						要古墳群	古墳中期後半～後期前半	21

表12　熊本県箱式石棺地名表（9）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
241	要3号石棺			175	46	35	礫	砂岩	2+2(1)	H		平		要古墳群　人骨　赤色顔料	古墳中期後半～後期前半	16
	要4号石棺			176	44	35	礫（赤色顔料）	凝灰岩 砂岩	2(1)+2(1)	H	×	平	刀子	要古墳群　赤色顔料　人骨3体	古墳中期後半～後期前半	16
	要5号石棺			165	42	27	赤色顔料	砂岩	2+2(1)	H	×	平	碧玉製管玉	要古墳群　人骨2体　赤色顔料　枕石　頭骨　蓋石に溝状加工　側石面取	古墳中期後半～後期前半	16
	要6号石棺						礫（赤色顔料）	砂岩 頁岩						要古墳群	古墳中期後半～後期前半	16
242	大口地神社石棺	宇城市三角大口						砂岩						朱塗布		21
243	塚神社石棺	宇城市三角太田尾														57
244	矢着石棺	宇城市三角太田尾矢着												消滅		57
245	越路古墳群2号墳	宇城市三角際崎														57
246	三角船員保険保養所内石棺	宇城市三角際崎														57
247	黒崎石棺群	宇城市三角黒崎						砂岩						赤色顔料		21
248	磯山A号石棺	宇城市三角志水						砂岩		H				磯山古墳群　石枕	古墳中期前半	57
	磯山B号石棺			230	80			砂岩	2(1)+2(1)	H	○	カギ状	鉄刀、筒型銅器	磯山古墳群　赤色顔料	古墳中期前半	57
249	寺島古墳群5号箱式石棺	宇城市三角寺島		190	48	36	板石・石灰藻	砂岩	2+2	H	○	カギ状	鉄剣、短剣、鉄鏃片	人骨4体　ノミによる整形痕　周辺より土師器	古墳前期後半	21
250	大崎箱式石棺墓	宇城市三角戸馳島内潟		250	100			安山岩						棺外に供献壺		21
251	金桁古墳群1号墳	宇城市三角中村前田					砂（赤色顔料）	砂岩	2+2	H			直刀、勾玉、土器	金桁古墳群　人骨5体　赤色顔料		57
252	平松1号墳	宇城市三角波多平松	○	228	50	50	粘土		複	ロ	×	平	鉄剣	平松古墳群	古墳前期後半～中期前半	25
	平松2号墳		○	195	40	40	粘土	砂岩	複	ロ	×	平	土師器	平松古墳群	古墳前期後半～中期前半	25
	平松1号石棺			230	69	48	粘土	砂岩	複	ロ	×	平	長剣	平松古墳群　赤色顔料　頭骨2個	古墳前期後半～中期前半	25
	平松2号石棺			181	65	50	粘土	砂岩	3+3	H	×	平	鉄片	平松古墳群	古墳前期後半～中期前半	25
	平松3号石棺			255	78	45	板石	砂岩	複	Ⅱ	×	平	長剣、短剣、、刀子、玻璃小玉	平松古墳群　赤色顔料　頭骨	古墳前期後半～中期前半	25
	平松4号石棺			205	55	50	粘土	砂岩	複	ロ	×	平	短剣、玻璃小玉	平松古墳群　赤色顔料　人骨5体	古墳前期後半～中期前半	25
	平松5号石棺			200	48		粘土	砂岩	複	ロ	×	平	土師器片	平松古墳群	古墳前期後半～中期前半	25
	平松6号石棺			206	60	50	粘土	頁岩	2+3	H	×	平	鉄剣、鉄片	平松古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	25
	平松7号石棺			257	82	50	粘土	砂岩	複	東：H 西：ロ	×	平	短剣、鉄鏃、貝釧	平松古墳群　赤色顔料　粘土枕　頭骨	古墳前期後半～中期前半	25
	平松8号石棺			195	60	38	粘土	砂岩	複	ロ	×		鉄鏃、鉄剣	平松古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	25
	平松9号石棺			200	46	40	粘土	砂岩	複	Ⅱ	×	平	鉄剣、玻璃小玉	平松古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	25
	平松11号石棺													平松古墳群	古墳前期後半～中期前半	25
	平松12号石棺			210	50	50	粘土	砂岩	複	ロ	×	平	刀子	平松古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	25
	平松14号石棺			173	40	38	粘土	砂岩	複	ロ	×	平	鉄剣　孔雀石製管玉	平松古墳群　小児棺が供献	古墳前期後半～中期前半	25
253	陣内古墳群3号墳	宇城市三角波多重盛山		210	60			砂岩	複	H				陣内古墳群　蓋石に溝状加工		21
254	際崎石棺	宇城市三角波多・際崎・磯山												蓋石のみ残存		21
255	西木浦古墳群	宇城市三角前越西木浦														57

表13　熊本県箱式石棺地名表（10）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石積み	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
256	御船古墳1号石棺	宇城市三角里浦		177	53	35	礫	砂岩	2(1)+2(2)	H	○	カギ状平		棺外より刀子　人骨2体　蓋石に溝状加工　赤色顔料	古墳中期	57
257	三角小学校石棺	宇城市三角本町														57
258	飛山石棺	八代郡氷川						砂岩								3
259	室の山古墳1号石棺	八代郡氷川今	○				礫（赤色顔料）	砂岩								27
	室の山古墳2号石棺		○	192	55	33	板石	砂岩	2+3	H	○	カギ状	鉄剣、刀子、鉄鏃、鉄斧、鎌、鎧	蓋石二枚に溝状加工、カギ状加工	古墳中期前半	27
260	飛石石棺	八代郡氷川大野飛石						砂岩								51
261	大島古墳	八代市大島前鼻	○										直刀			51
262	産島1号墳	八代市古閑浜産島												産島古墳群　人骨		51
	産島2号墳													産島古墳群		51
	産島3号墳													産島古墳群　人骨		51
263	大鼠蔵南東1号墳	八代市鼠蔵大島辺											土師器	大鼠蔵古墳群　人骨		51
	大鼠蔵南東2号墳												刀子、鉄鏃	大鼠蔵古墳群　人骨		51
	大鼠蔵南東3号墳			224	55	25			2+4	H	○	重	刀子、鉄鏃	大鼠蔵古墳群　人骨2体　棺外より鉄剣　棺外に埋葬・副葬面を持つ	古墳中期	7
	大鼠蔵南東5号墳			205	66	47	板石・礫	安山岩	1+1	H	○		飾、銅鈴、貝輪、刀子	大鼠蔵古墳群　人骨5体　蓋石に溝状加工	古墳中期	7
	大鼠蔵南東6号墳												鉄鏃、刀子	大鼠蔵古墳群　人骨		51
	大鼠蔵北東1号墳													大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北東2号墳													大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北東3号墳													大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北西1号墳													大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北西2号墳												土師器	大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北西3号墳													大鼠蔵古墳群		51
	大鼠蔵北西4号墳													大鼠蔵古墳群		51
264	小鼠蔵1号墳	八代市鼠蔵小島辺												小鼠蔵山古墳群		51
	小鼠蔵2号墳			180	60	35		砂岩	1+2	H	○	平		小鼠蔵山古墳群	古墳中期	1
	小鼠蔵3号墳			180	65	50		砂岩	1+1	H	○			小鼠蔵山古墳群　赤色顔料　装飾円文を有する　蓋石に溝状加工	古墳中期後半～後期前半	1
	小鼠蔵4号墳													小鼠蔵山古墳群		51
	小鼠蔵5号墳												土師器	小鼠蔵山古墳群		51
265	高島古墳群1号石棺	八代市高島		200	80			安山岩	複					高島古墳群	古墳前期後半～中期前半	65
	高島古墳群2号石棺			159	42	24		砂岩	1+2(1)	H				高島古墳群　赤色顔料　人骨　蓋石に溝状加工	古墳前期後半～中期前半	65
	高島古墳群3号石棺			200	60			砂岩						高島古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	65
266	用七古墳	八代市長田用七	○										刀子			51
267	田ノ川内2号墳	八代市日奈久新田田川内												田ノ川内古墳群　円形刻文		51
	田ノ川内3号墳													田ノ川内古墳群　円形刻文		51
268	塩釜山古墳群第2号墳	八代市日奈久大坪塩釜上														51
269	竹ノ内古墳	八代市日奈久竹ノ内														51
270	大王原遺跡	球磨郡錦町							複	ロ						35
271	鬼塚古墳	葦北郡芦北海浦堂本														51
272	セベット古墳群	葦北郡芦北海浦京泊														51
273	太田古墳	葦北郡芦北田浦太田														51
274	北園石棺	水俣市陣内北園											剣、鉄鏃、刀子			51
275	一本松古墳	上天草市大矢野新田		150	50			砂岩	2+2	II	×	平				51
276	浮無田北古墳	上天草市大矢野維和浮無田						砂岩						赤色顔料　蓋・板石露出		51
277	浮無田南古墳	上天草市大矢野維和浮無田						砂岩			×					51
278	大鷲浦古墳	上天草市大矢野維和大鷲浦						砂岩					鉄刀	破壊		51
279	胴ノ木墓地古墳	上天草市大矢野維和胴ノ木						砂岩			×			板石露出		51

表14　熊本県箱式石棺地名表（11）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備　考	推定年代	文献
280	越路北古墳	上天草市大矢野維和越路		180	62	50		砂岩	2+2	H	○			赤色顔料　土中埋没　蓋石に溝状加工　小口石材上面にチョウナ敲痕		26
281	千崎古墳8号墳	上天草市大矢野維和千崎		195	65			砂岩	1	H	○	カギ状		千崎古墳群	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳9号墳			204	58			砂岩	2(1)+2(1)	H	○	カギ状		千崎古墳群　蓋石に溝状加工	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳10号墳			172	48	50	石灰藻	砂岩	1+2	H	○	カギ状		千崎古墳群　人骨4体　赤色顔料　棺外より鉄斧、刀子、鎌、直刃鎌　蓋石に溝状加工　加工痕	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳13号墳			184	56			砂岩	2+2	H	○	カギ状	鉄剣、刀子、ガラス小玉	千崎古墳群　棺外より鉄剣　蓋石に溝状加工	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳15号墳			178	42			砂岩	2+2	H	○	重		千崎古墳群　赤色顔料	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳16号墳				70			砂岩		H				千崎古墳群	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳17号墳							砂岩						千崎古墳群　石材上面に面取り加工痕	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳20号墳						円礫	砂岩	1		×			千崎古墳群　加工痕	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳21号墳			163	47	25		砂岩						千崎古墳群	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳22号墳			173	65			砂岩	1+1	H (副室:ロ)	○			千崎古墳群　副室を持つ　面取り加工痕	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳25号墳			86	30			砂岩 安山岩			×			千崎古墳群	古墳前期後半～中期前半	59
	千崎古墳26号墳			176	51			安山岩 割石	2	北：H 南：ロ	×	カギ状		千崎古墳群	古墳前期後半～中期前半	59
282	千崎住吉祠古墳	上天草市大矢野維和千崎							複		×	平				51
283	仙十長瀬古墳1号	上天草市大矢野維和仙の十												蓋露出		51
284	広浦古墳	上天草市大矢野千束広浦	○	191	61	60	貝殻	砂岩	1+1	H	○		鉄刀	赤色顔料　周辺より装飾ある石材　人骨		28
285	成合津2号墳	上天草市大矢野成合津		167	46	47		安山岩	2(1)+2(1)	ロ	×	平		成会津古墳　赤色顔料	古墳中期後半	26
286	女鹿申古墳	上天草市大矢野女鹿申												土中埋没		26
287	樋合島塚大名神古墳	上天草市松島合津樋合島														51
288	大戸鼻古墳群1号墳	上天草市松島阿村大戸鼻・小葉山		153	36								勾玉			28
	大戸鼻古墳群2号墳		○	189	85	115	板石	砂岩	2+2	H	○	平		棺内に装飾円文　赤色顔料　蓋石に溝状加工		36
289	モヘ山古墳	上天草市松島永浦島	○													3
290	新地石棺	天草市有明														51
291	権六古墳	天草市有明下津浦権六														51
292	竹島古墳	天草市有明竹島														26
293	通詞島北古墳	天草市五和二江島頭														51
294	妻の鼻古墳群	天草市亀川妻の鼻												箱式石棺？		51
295	宮崎石棺墓群1号石棺	天草市倉岳棚底宮崎一五社宮上		140	80	25		砂岩	複	ロ	×		土師器片	宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群2号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群3号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群4号石棺							砂岩	複	ロ	×			宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群5号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群6号石棺							砂岩 花崗岩 頁岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群7号石棺			150	50	35		砂岩	2+2 (1)	西：Ⅱ 東：ロ		平	土師器片	宮崎石棺墓群　棺外より鉄製釣針	弥生末～古墳初頭	3

表15　熊本県箱式石棺地名表（12）

No.	遺跡名	所在地	墳丘	寸法(内法)(cm) 長さ	幅	高さ	床面	石材	長側石枚数	小口構造	長側石 加工	長側石 石継ぎ	副葬品・出土遺物	備考	推定年代	文献
295	宮崎石棺墓群8号石棺	天草市倉岳棚底宮崎一五社宮上						砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群9号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群10号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群11号石棺			115	53	50	板石	砂岩	複	Ⅱ		平	土師器片、鉄剣片、鉄鏃	宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群12号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群13号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群14号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群15号石棺													宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群16号石棺				60			砂岩	複	ロ	×	平	土師器片	宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群17号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群18号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群19号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群20号石棺			150	90	65		砂岩	複	ロ	×	平	土器、鉄剣、鉄鏃	宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群21号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
	宮崎石棺墓群22号石棺							砂岩						宮崎石棺墓群	弥生末～古墳初頭	3
296	名羽石棺墓群	天草市倉岳名羽														51
297	松崎箱式石棺郡	天草市河浦宮野河内松崎		125	50	50			複	ロ	×	重	鉄鏃			62
298	稚児崎古墳群	天草市栖本稚児崎須崎														26
299	先尾串古墳群1号石棺	天草市下浦先尾串		70	30					H				先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群2号石棺			75	30					Ⅱ				先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群3号石棺													先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群4号石棺													先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群5号石棺									Ⅱ				先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群6号石棺													先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群7号石棺													先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群8号石棺													先尾串古墳群		2
	先尾串古墳群9号石棺													先尾串古墳群　4号石棺の石材？		2
300	尾串古墳群	天草市下浦竹島														51
301	天附古墳群	天草市新和大多尾天附														51
302	樫ノ浦古墳群1号石棺	天草市新和上大多尾														2
	樫ノ浦古墳群2号石棺															2
	樫ノ浦古墳群3号石棺															2
	樫ノ浦古墳群4号石棺															2
303	横島金比羅古墳	天草市新和横島														51

※1「複」は報告で複数とのみ記述されているもの、石材が失われ正確な枚数が不明のものを示す。() 内は継ぎ目を補うように置かれた石材数を示す。
※2「H」はH字形タイプ、「Ⅱ」はⅡ字形タイプ、「ロ」はロ字形タイプを示す。
※3「加工」は長側石小口組合せ部分の溝状加工の有無を示す。
※4「重」は重継ぎタイプ、「平」は平継ぎタイプ、「カギ状」はカギ状タイプを示す。